

## 久美子の家族

小野 友貴枝

プロローグ

長女の珠緒が大学の受験に受かったのは、小田急沿線にある新百合大だけだ。その大学の教師課程に入ることになったとき、なぜか分らないが新百合大の親子面接を受けさせられた。

面接官が5人いた。久美子の方は、夫と珠緒の3人。いわゆる受験生のことを聞くよりも両親の社会的地位や財政状況、子育ての環境を知りたいのだということが分かった。

「両親ともに公務員ですか。共働きでは、誰が育児を」「義母が日中は面倒をみてくれました。また、子どもは3人いますが、次々と保育園に入れられたので、私は仕事を辞めずに働きました」

「じゃ、受験した珠緒さんも」

「はい、職場の近くの保育園に連れて行きましたので、子どもたちも大変だったかもしれませんが」

「お稽古ごとは、何を」

「ピアノ、そろばん、タップダンス、習字。習い事は一通り。でもそれがなぜ？」

「いや別に。大変だったでしょうと思って。家にピアノもある」

「ハイ、ピアノはあります。でも子どもはピアノのお稽古は、イヤがつて小学校で挫折しました。向いていなかったのでしょうか」と、夫の康一が事務的に答えた。

「お父さんから見て、珠緒さんは、何に向いていると思いますか」

「家は、教育者が多いので、この大学で教師課程を取ればと思います」

「初等科ですか」

「ハイ、はっきりした子ですから職業人にしたいと思っています」

この時の面接で「この大学はお嬢様教育だ」、ということが分かった久美子はもう、この大学に入れるつもりはなかった、久美子は、珠緒をお嬢さまにするつもりはなかったから。社会に出ていける能力を大学では身につけさせたかった。珠緒も同じ気持で、新百合大学を蹴って、予備校へ入った。

珠緒は1年間しつかり勉強したので、次の年には、いくつかの大学に合格した。その中でも、文系で名のある大学を選んだ。彼女は総合職で働きたい希望を持っていた。

珠緒は大学に入った時から調布にある2階建てのアパートへ希望通り下宿した。独りで下宿し珠緒がどんな生活をしたか、久美子はあまり覚えていない。なぜか、きつと下宿先へ行かなかつたような気がする。

珠緒が、時々家に帰ってきたときの姿は覚えている。なんかものを取りに来た、いやお金を貰いに来たのかもしれない。

### (1)長女

珠緒が大学2年生の夏休み、帰省した彼女に、久美子は、彼女の要求通り、13万円を渡した。

久美子が出勤する時間、珠緒は、予備校まで過ごした自分のベッドの中で眠っていた。

「もう、お母さん出かけるからね、夕飯は一緒にしようね。せんとくも干しておいてくれる、おばあちゃんの話も聞いてね」と、こんなことを頼んで出かけた。車を走らせながら、彼女が言った言葉「お母さんが帰

る前に帰るから」と言った言葉が胸につかえていた。

久美子は、10分も走らない車をバックさせた。そのときの職場へは車で通勤していた。保健所までの所要時間が40〜50分のところにあつた。

玄関先で彼女を呼んだ「珠緒、降りて来なさい。急いで」

珠緒は、寝ていたままのスタイル、Tシャツに短パンで階段を降りてきた。クチャクチャの顔に不機嫌さを表している。

「さつき言っていたけど、なに今日、帰るんですって」「テニスの合宿があるんだもの。河口湖」

「あなたの休みを一日千秋の思いで待っていたのよ。おばあちゃんも弟たちも。なのに、大学の話もしないで帰ってしまう。それだけでもない、今朝渡した13万円だって、決して楽なお金ではない。それで、夏休みは7月初めに入っていたのでしょう、やつと8月になってから、帰ってくるんだから」

珠緒は半分泣き声になって、「しょうがないわよ、いろいろ付き合ひがあるの」

「そう付き合ひがね。私の時代は、夏休みは、家の手伝いをするものだと思っていた」

「昔と今は違うのよ。今は家の手伝いなんか、誰も考

えてもいない。それよりもお母さん、もう遅いよ、職場に遅れる。20日過ぎに帰るから、仕事ためておいてよ」

「臨時支出は大変なのよ。下に弟、妹がいることも頭の中に入れておいてね」

「お母さんだけよ、そんなにぐちゃぐちゃ言うのは、どこの親だつて娘など当てにしない」

「夏休みぐらい当てにしなければ、やっていけないわよ。何でしょう、普段の時には、お母さんを当てにしないで、お金をたのむときだけ」

それだけ言うと、もう珠緒も、久美子も涙が頬に流れている。二人とも勝気だから一步も譲りたくないが、その中でさえ、珠緒の反撃の方が強い。久美子は子どもを押さえたつもりで実際は彼女の方が負けている。

久美子は声を荒げたい気持ちがあつたが、職場の予定の方が優先する。30分以上遅れるわけにはいかない車のキイを持って玄関を出た。

「これでは遅刻だ」と思って、久美子は、職場に急ぐ。

車を飛ばしながら考えたことは、なぜこんなに娘と通じなくなつてしまったのだろう。なぜ、自分まで泣いたのだろうかという不本意さ、手強い相手に出会うとすぐに泣く癖は母娘で似ていると変な感想を抱いた。

いつも走る246号線の七曲がり国道は、夏休みのせいか上りの対向車が多い。なんの変哲もない山々のニセアカシヤの葉が風にあおられている。青嵐は気持ちに似ている、誰かにぶつかりたい感情が胸に起こる。いつでもこんな気持ちをなだめながら生きてきた。人々は、観光で海や山に行く夏休みでも、久美子は仕事と家のことで四苦八苦してすごした。

子ども達が小さい時には、母の夏休みが首長くして待っていた。

「お母さん、どつかへ連れて行ってよ、毎日家にいたのでは日記も書けやしない」と、催促されて、休暇をとるのに必死だった。やつと休みを取れて、計画もななく3人の子どもを連れて旅に出た。行く先は日本中どこでもいい、全国に散らばっている友達を頼つて、ホテルだけ取つてもらつた。友達は見かねて旅行のプランを作ってくれた。ツアーを使うなどという洒落たプランを考えたこともない。じゃらじゃらとお金を浪費し、母親が働いている、普段の償いをした。夫の康一を当てにしたこともない、康一を当てにする旅行など、実現できなかったためしがない。そんな綱渡りのような夏休みを過ごしたことを思い出す。それで、久美子は課題の多い夏休みをネーミングして「夏地獄」と称した。

勤めから帰った家の中は足の踏み場もないほど散らかっている。暑い夏は、子どもにとつても欲求不満の日々だった。

三人がそれぞれ母親を頼らなくなり、自分勝手に遊ぶようになった。次女も長男も友達が多い。必要なのは、母親の財布の巾着だ。

珠緒が大学生になって夏休みぐらい家を手伝ってもらってどこが悪いだろう、彼女にないものねだりをしたのか、と心がざわついた。

それから、久美子は彼女に期待するのはよそうと思つた。一流の大学に入ってくれただけでも感謝しなければいけない。私大と言っても月謝は安いし、助かっている。一生懸命勉強してくれたお陰だ。彼女の自立心は、もうこのころから養われていた。

大学1年生の夏の思い出をなぞって行きながら、この時が、素直に母親に姿を見せたのも最後かも知れない。後味の悪い一日になった。叱られた珠緒は涙を拭き拭ききつとお勝手をかたづけ、掃除機をかけてくれただろう。しかし、母親と顔を合わせたくないので、逃げるように自分の下宿へ帰つたに違いない。大学生が役に立つと思つたのは間違いで、今の学生は、母親からお金をもらえばいいと割り切っている。

能力の高い子ほどエゴが強いといわれる、この言葉通りにいけば、珠緒は自分本位に育ってしまったのかも知れない。

家に帰ると、もう彼女の部屋も居間にもさつきまでいたという気配さえ残っていない。

義母が独り、久美子を待つて庭に立っていた。

「珠緒は、昼ごろ帰つた。何か大荷物を抱えていたけど、バスで帰つたのだろうか」

「一晩しか泊まらないで。本当に当てにならない子だから」

「あんたも大変だね。私はどの子も家を出さなかつた、みんな家から通させた。小田急に乗れば都心の大学ならなんとか通えるのに。下宿などさせるから親の手伝いをしなくなるのだ」

姑の千代は、不満げに言った。姑は、平屋の古い家で4人の子を大学に入れた。定年後脳溢血で急死した夫は地方公務員であつた。そのせいかな、この地域では珍しく、長男の康一も公務員、次男が教師、三男が電電公社。長女は市役所に勤めている、というそろつた高学歴家族である。

久美子は共稼ぎを条件にこの家に入った。姑が子育てを手伝いますと言つてくれたので気兼ねなく働けた。

その代り、久美子に働いて貰らって、家を新築して老後を安心して過ごしたかったのだ。久美子は、長男の嫁として、夫の弟、妹の結婚を手伝い、姑の希望する家を造って孫育ての労に報いた。

珠緒と一緒に行動して、落ちつかない感情を持ったのはその頃からで、その後、さらに母娘の関係はぎこちなくなつた。

彼女が結婚した時、久美子はさびしさを味わつたかと訊かれれば、正直、他の子供、兄弟が離れるときに味わう感情は持たなかつた。普通なら持つはずなのに。珠緒が言つた言葉で、「私は、お母さんに嫌われていると思つた」と結婚するときに言つた。なぜ、と訊き返すと、「私が結婚すると言つた時に、お母さんはすごく喜んだ。邪魔ものがいなくなつて嬉しいように」とこの言葉を聞いた時、久美子は子どもの結婚でもすぐに納得してはいけなかつたのだと、変な勘繰りを持つた。しかし、その言葉を聞いた時に久美子は怒らなかつた、または言い訳もしなかつた。正直、心の隅に小さく合点する気持ちがあつたことは否めない。

珠緒の結婚は、職場結婚ですでに総合職として5年、28歳になつていた。もう仕事は続けられないという限

界に達していた。母親には愚痴を言わなかつたが、珠緒は同居している妹に限界だと愚痴をこぼしていた。仕事を辞めたいと思つて、妹の華衣から、久美子は聞いていた。こんな大事なことでも全て間接的に情報が入つた。

珠緒が仕事を辞めようかどうか悩んでいた時、同じ班にいた男性が、偶然なのか、「結婚して下さい」と言つて申し込んでくれた。珠緒は「ラッキー」と言つて、一、二もなく承諾したと聞くから、母親がいちやもんつけることはない、「良かったね」と言つた。この言葉は、珠緒にとつては不満だつた。母親にとつては、総合した言葉で、その言葉以上も以下でもない。職場がいいので相手に、まして毎日会つていて関係では「承諾する」ことに問題はなからうと、全体的に感じていた結果である。それ以前にも、彼女は、会社のハードさを華衣に愚痴つていた。久美子は、華衣から間接的に聞いて、いつ辞めてもおかしくないな、と感じていた。でも珠緒が言いだすまで尋かない、ことにしようと思つていた。

「寿退職する」と言つた。それも珠緒の選択ならと了解した。こんな大事なことを後報告で聞くことの不甲

斐無さはあったが彼女が決めたことだからと「おめでとう」と、こだわらずに言った。

「どんな仕事をしているの」と、久美子が訊けば、珠緒は面倒くさそうに、「私と同じよ。学生の進路指導」  
とだけ返事した。

「どのようなどころで」と久美子が訊けば、

「日本中を歩くの、私が歩いたように」子どもだましのような返事。母親に説明しても分からないだろうという投げやりさが表れていた。久美子はそれ以上突っ込まない。

こんな親子だから、意思疎通が悪いかと言うと、そうとは思わなかった。就職してからの珠緒とは話らしい話をしたことはないし、華衣を通して様子が伝わってくるだけで、それでいいと思っていた。それ以上踏み込んで互いに感情的になっただけだからいいやと思っていた。もちろん、昔から母娘でくちやくちやしやべる関係ではなく、決まったことだけ報告しあっていた。

結婚式の段取りも、生活する場所も彼らは二人で決めた。久美子は、あっさりとして承知した。

6月中旬の結婚式は、赤坂のプリンスホテルで行われた。式には、夫の兄弟、久美子の兄弟が出席してく

れた。みんな夫婦での参加で盛大に行われ、いい式ができた。新郎の中森もすっかりした男性で、両親にきちんと躰けられていて助かった。久美子のように高校卒業から手元から放してしまつては、何にも躰けてないことを感じた。子どもたち3人ともみな同じで、高校の時から家を離れてしまうことは、意思疎通ということの間が開きすぎていることを実感した。

結婚生活が始まつてからも、二人は親の手を借りることもなくマンションを借りて共稼ぎを続けていた。そして、間もなく、珠緒は妊娠し、子どもを授かった。

出産後は、珠緒は久美子の元に帰ってきて一か月暮らした。高校卒業後初めて一緒に暮らす、この産後の世話は貴重だった。孫を中にして久美子の母親の役割、娘の役割がバランスよく取れて掛け替えのない財産を貰つたような気がした。

久美子は、実の母を中学の時に、亡くしているので、子どもを母に見て貰っていない。実の母親に産後の世話になれるというのは、本当に果報だと、うらやましく思っていた、最高のあこがれでもあった。

久美子は、一週間の休暇を取って、珠緒の産後の面倒を看た。

## (2) 孫たち

長男の敦也と8歳離れた諭は、祖母の久美子になつき、1歳2か月可愛い盛りだ。

産前産後、ざっと1年間休んで、この4月から珠緒は正常勤務に入った。と同時にしばらく休んでいた久美子も、敦也の時と同じように週一回、水曜日、諭の保育園の迎えと泊りの世話を頼まれた。

4月から始まった諭の世話は、すでに半年以上、暑さも通り越して、いい季節に入った。瀬上へ行くことはけっこう大変だが、諭の可愛さには叶わない。久美子は65の歳を顧みず、意気を感じてせっせと通っている。少しでもこの行為を疑えば、「イエス」「ノー」をはっきりさせたいこともあるが、盲目的な愛のように、孫愛を信じて久美子は通っている。

日暮が急に早くなった10月半ば、夕靄が立ち始めた。「ちよっと、野菜を取ってくるから」と、まだ話の通じない諭を玄関において外に出た。彼が後を追ったことは念頭にあったが、ほんのちよっとと思うことに気を取られ、後ろ手にドアを閉めた。ジャガイモを手

して戻ったとき、戸が開かない、おかしいと思った瞬間、玄関は諭によってロックされたことを知った。

「サトシ、動いちや駄目よ、そのままそこにいるのよ」大声で諭に声をかけた。言葉が分かるわけもない諭が急に静かになった。玄関の三和土にいたはずなのに、いったいどこへ行ったのだろう、久美子は慌てた。

隠し鍵がどこかにあったかもしれないと、家を一周したが見つからない。

携帯があれば、鍵屋を呼ぶことはできるが、エプロン一つで出てきたから何もない。

そのとき、頭を掠めたことは、レンジのガスを点けてきたような気がするのだ。諭が久美子を探しにレンジの傍に寄ったら大変。いや風呂場に這って行くかもしれない、バスタブに水が張ってあったかもしれない、絶体絶命。

一分、一秒でも早く内に入りたいとあせった。どうしたら諭を救出できるか、たった一つの方法として、窓ガラスをぶち壊す、それしか方法はない。

でも、ガラスに細かい針金を張り巡らしてある窓はやたらなことでは破れそうもない。

久美子は道に立って、「助ケテー、助ケテー」と叫んだ。

通行人ではなく、隣りの主夫が久美子の前に立った。「家の中に孫が、この窓を」

彼は、久美子の指す家の中の状態が掴めたのか、飛ぶように家からハンマーを持って来た。

一気に割った窓から彼は足から入っていった。

内から開いた玄関へ、久美子はなだれ込むように入った。

ガスは点いてなかったが、論の姿はない。トイレ、ふろ場まで探した。「サトシ」と呼んでみた。2階の踊り場辺でゴトゴトと音がする。論が下を覗きこんでいるのではないか、キョトンとした眼。久美子は、階段を駆け上がった。彼は何が起きたのか分かってないだろうが、異変を感じて久美子に抱きついた。

隣人の機転で、大事に至らなかった。

「ありがとうございます」と、助けて貰った礼にしてはありきたりだが、頭を深く下げた。

次の朝、7時過ぎて起きてきた珠緒に昨晚の出来事を話した。

「窓ガラスはどっちでもいいけど、玄関を出る時は必ず、鍵を持って出てね、内から戸締めされる事故結構あるのよ。その時は消防署119番に電話すれば、す

ぐ来てくれるから覚えておいてね」といかにも優等生の返事だ。ねぎらう言葉もなく、突っ立ったまま答える。

「ガラスは、すぐに手当するから、心配しなくてもいいけど」

確かに、先に、割ってしまった窓ガラスのことを謝らなければいけなかったのか、そのことを忘れていた。夕べはビニール袋を貼ったままで寝た。確かにこのままでは危険だったろう。この辺は郊外だが、珠緒は、ことのほか用心深い。

「鍵を予備に、どこかに隠しておいてよ」歩くこともできない孫に締め出されるとは夢にも思っていないかった。

「合鍵ね。家では鍵を失くす名人がいるから、何個作ってもみんな失くしちゃうのよ、そのうちこの家は、いつ、誰に開けられるか分からなくなるわ」

おかしいことを言う珠緒に、久美子はちよつと気分を疎がれるたが、論に怪我させることもなく終わって、ホッとした。他のことは何でもいいやという気持ちだつた。



水曜日は瀬上に泊まりがけで、珠緒の子供たち、二人の孫を見に行く日である。

小学校5年の長男の敦也がまだ帰ってこないうちにと急いでバスを降りた。バス停から5分も掛からないところにある家、敦也の下校に間に合うだろうと急いだ。住宅地に入ったときに見える自転車がない。出かけたのだろう、いつもなら4時ごろに帰ってくるのに、今日は早かったのだ。彼がいなければ早く来た意味がない。

一直線の通路に区画整理された住宅が七件並んでいる。一軒10m程度の長さだから道路の突き当りまでの長さは70mほどだ。右側は運送会社の駐車場。夜になると車がいつぱいになるが、昼は空いて雑草が茂っている。

手に持ったカバンには、野菜やら肉、果物まで入って重い。重い中身を助長するものとしてチューリップの球根がある。道路際の垣根の傍に植えておこうと思つて、自宅に植えたものの半分を持ってきた。珠緒の家に来るのは週一回だけど、草花の咲いていない家は淋しい。

家のそばまで来ると、外で女の子を遊ばせていた、隣の主婦が寄ってきて「これ」といつて手渡してくれ

たのは、ビニールの小さなケース、鍵入れだ。

「敦也君が落としたのでしよう」鍵の入ったケースだ。ありがとうございますと、礼を言いながら、「ホントウニ」と小さい声で舌打ちした。敦也は、鍵をよく失くす。数えたらきりないほど、久美子が通いだしてからも4個は紛失している。そのたびに母親の珠緒に叱られる。叱られる敦也は、気持が萎縮しているのではないか、と思う。なぜ、失くすのかと言いたいが、失くすことになぜはない、と久美子は思いながら受けとつた。でも、敦也が叱られるところを見るのはいやだ、というのが本音である。

せつかく天氣が良くほかほか小春日和なのに、と水を差さされたような気持になった。

主婦は前の道路を庭のようにして女の子を遊ばせている。傍に輪つぱのついた小さい自転車がある。朝、幼稚園に行く姿を時々見かけることがある。ヒラヒラした人形のような姿だが泣きじやくる姿はすさまじい、反抗期なのか、独りっ子のせいなのか、地団太踏んでごねる。

「もう、自転車に乗れるの？」

「乗りがつて一生懸命ね」女の子はうれしそうに顔を上げニコツとした。日中、母親と遊ぶ姿はほほえま

しい。こんなゆとりのある風景は、共働きの家庭では取れない。

敦也のカバンは玄関に放つてあった。黒い汚れたカバンは重そうに肩を通す紐が上になって、魚が腹を出すようにひっくり返っている。

即刻しなければならぬことがある、まず、部屋のシャッターを上げ、空気を入れ換える。久美子は着替えて、スモックのようなエプロンをつける。風呂水の入れ換え、洗濯物の取り外しを至急にする。

キッチンに入れば、野菜の下ごしらえ、肉やら生ものは冷蔵庫に。夕飯は、スキヤキだから、シラタキやら焼き豆腐を電子レンジにかける。

手さばき良くあれもこれもキッチンの水を出しながら、体を動かす。

そこへ、ひよっこり敦也が帰ってきた。いつものように鼻歌まじりで明るい。敦也の声を聞くと久美子はうれしくなる。

傍にきた敦也が「おばあちゃん、おばあちゃん」と猫なで声で呼ぶ。なんか頼みごとをしたいときの声だ。

「何よ、どうしたの」久美子は鍋の蓋を開けて見ている。ちよっと待ってねと言つて人參を箸でつまんだ。

ニンジンの色づいてはいるが、まだ固い。「それで」、

と次を催促する。瀬上来ると、ニンジン、ジャガイモ、タマネギが冷蔵庫を占拠している。ほとんど料理しない珠緒がニンジンでなにを作ろうと思つて買うのか、いつも分からない。久美子のレパートリーでもニンジン料理は少ない、きんぴらにするしか能がない。

敦也だつて食べたことないのじゃないかなと思う。

「ブックオフへ行きたいんだ、付いて行って」久美子の傍に寄つて来て鍋のニンジンを一緒につまむ。5年生なのに背丈は久美子を追い越している。

「なに、作るの」と訊く。「ニンジンはカロチン、ビタミンAが体に大事なんだよね」、「学校で習つた?」と続けた。

「それで何でしたっけ、あ、ブックオフね」

子供が本を売るときは、保護者同伴でなければならぬことを知っているの、「わかった。敦也はNOVAへ行くのでしょう、遅刻するといけないから、すぐいこうか」孫にはいつも甘い「バーちゃん」を丸出しにして、エプロンを外した。まだまだ、下ごしらえができていない、ニンジンのきんぴらもハンバーグの準備もまだだ。

「あつちゃん、寒いから、ジャンパーを着てよ、今日、鶴巻から持ってきたから」

市民の日に、リサイクルショップで買ったものだ。敦也の値の張る上着もリサイクルで買ってくる。

「ありがとう」敦也のありがとうは、いつ聞いても明快だ。

彼は久美子がわたしたしたジャンパーを着て暖かそう。

肉付きのいい丸い顎をした彼は、童顔で可愛い。髪の毛も黒くもじやもじやしている、父親譲り。

「暖かい」と訊く久美子に「うん、暖かい」と、素直に応えた。

「さ、急いでいこう、時間がないよ」

「おばあちゃんは自転車で行ってよ、僕、走っていくから」

「駄目よ、夕暮れ時の自転車は危ないから、あっちゃんが乗って、おばあちゃんは走って行く」

二人の呼吸は合っている。普段は、敦也のほうかざるずるして、久美子はイライラする番なのに、こういう時の彼はすばしっこい。

敦也は、久美子に気を遣いながら自転車をこぐ。この辺一带の歩道は狭くでこぼこが多く整備されていない。後ろから追いつく自転車が警告のベルを鳴らす。

避ければ、歩道からはずれそうになるので、そのたび敦也は、後を振り返って待っててくれる。

「歩きにくい？」敦也に訊かれたが、その返事はさておき、「あっちゃん、カギ忘れたろう」久美子は、思い出して言った。

「ア、どこにあつた」大きな声で言つて、汚い手を出した。

「隣の奥さんが拾ってくれたの、玄関先に落ちてあつたつて」

彼は、いやなものから避けるように久美子から眼を外した。

「お札を言わなければね。そんなことよりも早く行くうよ」

「そうだね」低い声で返事して、ペダルに足をつけた。ゲームやらCD、DVDの売っている店は、古いものも買い取る、そんな仕組みになっているが、中古のものを売るにはけっこう厳しく、チェックが入る。本が二百円で売ただけで、ゲームのソフトは売れない。

「駄目だったね」久美子が慰める。

彼女は敦也の気持ちになつて残念だと思つた。

「おばあちゃん、別の店なら、ここほど厳しくなくて売れるから、そっちへ行こう」

敦也は、ドアに向かいながらおねだりするように甘えた声で言った。

「だって、これから英会話のNOVAでしょう、行く時間がないよ」

人々の顔も見えない暗い道を歩きながら久美子は迷った。敦也の言うとおりに成ってはいけないと。

「NOVAから急いで帰ってくるから、それから一緒に行つてよ」

行つてよ、という頼み声、彼が本気であることが分かる。

「うん、いいけど。だけど、これから、保育園に諭を迎えに行かなければならない、諭も一緒に行けるところなの」

「ちよつと遠いかな、僕が負ぶうからいいよ、NOVAから急いで帰ってくる」

久美子は、遠いところはどうかなと思つた。諭を保育園に迎え、食事、風呂と段取り良く動かなければ、彼が眠くなってしまう。しかし、敦也の役にも立ちたい。

こんなやり取りしている間に日はすっかり暮れてきた。人通りも多く、歩いて帰宅する人、自転車で後ろから追いつく人と歩道も車道も薄暗がりの中、駅から離れる方向にラッシュだ。家に急ぐ自転車の人に追いつ越されまいとして久美子も急いだ。

若葉保育園に行く途中、バス停の傍にくと敦也がまだ立っていた。

彼に向かつて手を振つた。彼も手を挙げた。

「行つてらっしゃい、待っているから」見ている間に路線バスが来た。

バスは暮れはじめた道を赤いテールランプを残しながら、去っていく。

保育園には5時30分に着いた。体育館のような檀円形の屋根の建物。2階建てで、歩けるような子は2階。

諭は階段の傍の部屋にいる。彼を見れば愛おしさが湧く。一日大勢の中で過ごしていたと思うと不憫さがこみ上げる。寂しがることもなく、気持ちよく過ごしてくれたことに、頭をなでて褒めてあげたい。2歳半の彼も一生懸命生きている。しかし、諭は、久美子を目で確かめているがニコツともしない。すぐによそ見をする。兄と違って、愛想笑いもしない、これが次男の次男らしさかなと思う。久美子も意地を張つて彼が近寄ってくるまで声を掛けない。しかし時間がない、久美子は急いでいることを思い出して、「おいで」呼びかけると爪先立ちで寄つてきた。最近このポーズが得意だ。照れ隠しに、ヒョコヒョコと歩く。階段は、手す

りに掴りながらも独りで下りられる。

厚地のトレーナーを着せた。黄色が良く似合う。すべて敦也のお下がりだ。

保育園から、自宅まで200mほどだから遠くない。窮屈そうにベビーカーに乗っていた諭が「マンマ、マンマ」と、久美子の手を突つく。ポケットに入れていた棒チーズをちぎって口の中に。一度茹でたジャガイモを持ってきて、口の中に入れてやったことを諭は覚えていて、その場に来ると食べ物を使ひる。まるで子犬見たいだ。

「ア、ア」とか言いながら空を仰ぐ。中空に半月が出ている。雲一つない一日だったが、夜まで空は澄み渡っている、小春日和の暖かさだけ残して。自動車一台しか通れない道に車がライトをつけて近寄ってくる。やり過ぎすために脇によけた。

15分ほどで、玄関に着いた。暖かい居間に、テレビをつけておくと、諭は座椅子にチョココンと座った。

直ちに食事の用意に入る。食事は、敦也と諭の分を用意する。好みが違うからせわしい。彼らの手料理は、久美子が来たときでもなければできない。彼女は本音を言う料理は苦手だが、瀬上に来ると一気に力が出て、頭と手が動く。それは使命感に近い、孫たちに手

作りの美味しさを味合わせたい、という思いにかられるからだ。

玉ねぎをむき、みじん切り機に入れる。素早く回転し、ハンバーグの準備に掛かる。美味しいハンバーグは久美子の得意なレパートリー。

7時過ぎた。諭は珍しく、久美子の傍に来ないでテレビ漫画に熱中している。兄の敦也に負けず諭もテレビ好きだ。彼らが、親のいない時間をテレビで潰しているから好きになるのは当たり前。

「ただいま」敦也が大きな声で帰ってきた。NOVAでは英会話に集中できずに家に帰ることばかり考えていたのだろう、勇み声。彼の声を聞くと、久美子の迷いも吹き飛ぶ。

「どうするの、ソフト売りに行きたいんでしょ」  
彼が、靴を脱ぐ前にエプロン姿のまま後ろから声をかけた。

「うん、行きたいけど」声だけ返ってきた。

「それなら、準備をなさいよ」

返事がない。あれ、と思って振り返ると、なんか考えごとをしている。そんなときの彼は目を伏せて顔全体が曇る。言葉少ない分、彼は内面に溜めこむのだ。

久美子は、走りだした気持が急に停まってしまった。

「どうしたの、行くの、行かないの。行かなければ、論を風呂に入れてしまふけど」

たたみ掛けて訊いた。

「うん、行く。論は、僕が負んぶする」

「いいよ、負ぶわなくとも、おばあちゃんがベビーカーに乗せていくから」

論にはオーバーオールを着せ、久美子はマフラーを首に巻いた。この一週間、彼女の喉はいがらつぽく、咳が少し出る。

久美子は、敦也が行こうとしているところが、どのぐらいの距離があるのか、それとも、どんな店なのか、知らない。ただ、彼たちの元気な顔を見るのが楽しみで、無理をしても連れて行きたいと思ってしまう。

敦也は、ストンストンと足元も見えないような暗がりを大股で行く。論は、ベビーカーの中で、頭を振って喜ぶ。頭がシートにぶつかって、脳震盪を起こそうだ。

こんなに喜ぶ二人を見たこともない。駅の方を目指すので、歩道を走る自転車は少ない。11月の風は冷たい。久美子は喉を痛めているので、少し心配になる。これ以上咳が出ても困る。

走っても走ってもまだ着かない。どこまで行くのか

心配になる。

「ネエ、あっちゃん、どこまで行くの」

「イトーヨーカドー、ほら、あそこ、三つ目の信号」

「イトーヨーカドーって、遠いよね、バス停が相原台、西町、上原。そんなに遠いとは思わなかった。このままでは無理だよ」

道端で、迷っていると、偶然、眼の前にバス停があった。

「バスに乗ろう、バスに乗る」

ベビーカーを二人でバスに入れた、ヨッコラッシュという感じ。論が乗っているんだから重い。のんびりした敦也も一生懸命だ。

バス停2区間だけ乗ってガラス張りの大きな店に入った。ブックオフと同列店だ。

「これ売りたい」

敦也に任せておけないので、久美子自身がカウンターに進んだ。しっかり売って新しいソフトに買い替えない。

品物のようすや、部品の備わり具合を調べていた店員が、「身分証明書を見せてください」と事務的に言う。久美子が無意した証明書をしっかりと見て、「おばあちゃんに間違いないですね。じゃ、ここに署名してください」

さい」と用紙を手渡される。

久美子は、氏名、住所を記録した。その間、敦也を少し傍から離しておいた。子供連れの足元を見られてもいけない、と思ったので。

「七千円」

3点で、七千円にもなった。「あっちゃんどう」

「うれしい」彼に笑顔が広がる。

「良かった」久美子は、何の予備知識もないのに、ただ売れただけでうれしい。

喉の痛さも、ここまで車を押ししてきた大変さも消える。敦也のために、そして彼の笑顔に出合えれば、こんなうれしいことはない。

敦也は、店員に、話しかけている。

「その上の段のゲームソフトはいくらですか」

肥った店員は、ズボンが落ちそうなほど体をひねって、高い段から、箱を下ろしてくれた。

「五千円。これでよいでしょうか」店員は忙しそうに体を半分ずらして次の客を見ている。

「エ、いいです」敦也は、ショーケースの上に箱を戻した。

「どうしたの、買うの」敦也は、「ううん」と否定して、帰ろうとしている。男の子だからか、いちいち説明し

ない。

「それ、帰ろう」とベビーカーを押しで一気に「マカド」を出る。カーに乗っている論だけは元気に乳母車の中でまた頭でリズムを取っている。

帰りはバスに乗らずに1キロ以上、バス停四か所を走ってしまうつもり、バスに、カーを乗せる手はずを考えるだけでも面倒だ。久美子は来た道をどんどん走った。8時に近い時間は、すっかり夜になっていた。体に冷たさを感じる、論に風邪引かせてはならない。

敦也の足が遅くなった。久美子は立ち止まって、どうしたの、と後を振り返った。何を言っているのか、耳を傾けるほど小さい声で、「おばあちゃんに迷惑をかけると、お母さんに叱られる。迷惑をかけちゃいけないと言われているんだ」と言って、首を下げている。「いいじゃないの、敦也が大きくなったら返してくれば。おばあちゃんが歳取ったら、あっちゃんに面倒見てもらうから」

「うん、面倒見るよ、おばあちゃんの肩叩くよ」

やり取りする間も惜しく、どんどん走る。しかし、彼の足はまた遅くなる。考えることがもつとあるらしい、困ったものだ。

「どうしたの？」久美子は催促した。

家の傍まで来たとき、彼は困ったように重い口を開いた。「鍵がない」「エー、鍵がない、また、よく見ても」久美子は、思わず顔をしかめ、彼をなじった。

敦也が持っているビニール袋、ベビーカーの回り、洋服のポケット、全部見たが、鍵はない。

「どうしたのだろう、困ったな」久美子は、また戸締めされる憂き目を味わうのかと思うとぞっとした。

「大丈夫だよ、さつき拾ってくれた鍵がある」敦也はポケットからもう一つの鍵を出してドアを開けた。どつちの鍵をなくしたのか、本当に敦也の鍵がなくなつたのか、ここまでくると久美子には分からない。

押し問答するよりも鍵を探さなければならぬ。論はベビーカーの中で居眠りし始めた。

家に入って、今まで買い物をしていた「マカド」店へ電話を入れた。「それらしいものはありません」という返事。困った、敦也も下を向いたままだ。さつきソフトが売れて喜んでいた顔とは大きな違い、母親にまた叱られると思うのか暗い表情。

久美子も、道路を走りながら味わつた、孫たちとの一体感、敦也を喜ばせることができた満足感が消えた。敦也が喜んだときのこみ上げるような悦びは、なんだろうと思うほど簡単に消えた。鍵をなくしたこと、昼

に隣人が拾ってくれたことも含めて、久美子は珠緒に言わなければならぬ。敦也は、敦也で、また叱られるのだ、と怯えにも似た怖れを味わっている。

バス会社サービスマスターへも掛けたが、こちらも落し物なしという返事。道路に落ちていたのかもしれない、明日、朝一番で敦也に探させよう。

敦也と一緒に喜んだ気持は吹き飛んで、しょんぼり夕食を食べた。論に二人の気持が伝わるらしく、彼も沈んでいる。暗い夕飯になってしまった。

論は、早朝に泣くことが多い。夜泣きの延長線なのか、それとも母を慕う寂しさなのか、傍で寝る久美子を悩ます。3時ごろから、時々起きては、ヒクヒク泣く。言葉を言わないから、なぜ泣くのかわからない、習慣性なのかもしれない。久美子は泣く論の背中に手を入れて擦ってやる。このやり方が彼の気持をなだめるのに一番いい方法だ。彼の背中はアレルギーのせいかガサガサしている。

夜中に帰った珠緒に話す機会は、早朝、一番にあつた。論が、朝早くぐずって困っているとき彼女が顔を出した。

「敦也が鍵をなくしてしまったの。昨日は2回も」



どうして失くしたの、と訊かれ、昨日ソフトを売りに行つたことを省くわけには行かない。珠緒は、気難しい顔をしている。鍵を落としたぐらいで、怒られていたのではたまらないと気になったが、ここは穏やかに出るに限る。

「ゲームソフトを売りに行つたのよ、保護者が付いて行かなければならないから私が一緒」

久美子は座りなおして一気に言った。喉がいがらっぽく声がかれている。

「エ、ゲームソフトを売つたの、それは駄目だと厳しく教えているのに」

珠緒は、久美子の様子など視野になく、駄目なもの駄目だという強さがある。

「どうして、見飽きたものならいいじゃないの、なぜ」珠緒は、気分悪そうに、「だって、大人が買ってあげたものを換金して、また新しいものを買おうとするのはいけないことだと思わない。それを子供にやらせるのはもつといけないよ」

「そうかしら、買え替えていけないかしら、一つの循環だし、知恵じゃないの」

久美子は食い下がって手を握りしめた。いつも久美子の方がすんなり負けるのでここは踏ん張りたかった。

椅子に座っていたのに立ち上がった。

鍵のことはどこかへ飛んでしまつて、ソフトを売つたことに話が集中した。

「厳しく駄目だといっているのよ」

「知らなかった。そんなに悪いこと？ 私なら、敦也がそうしたいと言うなら付いて行って、どんどん新しいものにチャレンジさせるな」

「お母さんだって、子どもにはきつかつたくせに。孫には無責任なんだから」

だから、敦也が帰り道、暗く沈んでしまったのは、母から禁止されていることを、祖母になら頼めるので、抜け策をしたからだ。鍵の紛失がなければ、見つかることがなくて済んだのに残念。

急に、久美子は、敦也が不憫になった。何でもかんでも、コントロールされて、独りで留守番しているのだから、悪知恵が働くのは当然だ。

「そうかしら、悪いことだと思わなかったから、かえて、私のほうが煽つてしまったわ、ごめんさい」

敦也は、すでに母親に叱られることを予感していたようだ。

「安かったのよね」

「安かろうが高かろうが、子供が換金をするのは先

生からも禁止されている。また、鍵をどうして失くすのだろうね、年中よ」

敦也が怖れていた、鍵のことに珠緒の関心が向いてきた。

「そうかと言って、敦也のなんかが欠如しているとは思わないし、後ろめたいことをしたので注意散漫になってしまうのかな。鍵を失くす敦也を丸ごと抱きしめないで治らないかもよ」

久美子はしどろもどろで思いつくまま、意味のない言葉になった。本当は、敦也の段取りできない欠点は、珠緒の父親でもある大里に似ているから、きちんと言えない。そして、夫の性格を一番嫌っているのが久美子なのだ。

「可愛がっているわよ、気持を聞いているだけ」

珠緒は、久美子に向いていた眼を外して玄関の方へ視線を泳がした。玄関に誰かが入ってきたのか、ドアの音がしたような気がする。風の音だった。この家の間取りは、一階はフラットだからどこにでも話し声が筒抜けだ。

「なんていうのかな、母親が忙しいから、心が通じ合っていない」

何とひどいこと言ったのだろうと、久美子は自分の

言葉にたじろいだ。

本心をつかれた珠緒はさらに表情を硬くした。誰の子かと思うほど三白眼の眼が怖い。

娘の急所を突いて決して気持ちのいいものではないのに、また突いてしまった。言葉のやりとりは虚しい。

「私の友達で、いつもなんかを失くす人がいるの、その人は落ち着きがなく、片付けが出来ない。歩けば、ものに躓き、ゴミ箱はいつも蹴飛ばす。私はその人が、厳しい親に育って子供の頃からの抑圧があった。落ち着きをなくしているんだと思っている。敦也がそうだとは言わないけど」

久美子は、敦也の整理整頓の出来ないところが、夫にそっくりだと言いたかったのだ。でもそれを言えば自意識の強い珠緒を刺激して喧嘩が止まらなくなる。もう終わりにしたかった。

「そうかと言って、駄目なものは駄目。他所では親がついていって取り替えているのかどうか知らないけど」

「でしよう、親が便宜を図っているのよ、不要なソフトを売買して、悪いとは思わないな」

久美子もどうせここまで言ったのだから言ってしまうおうと決めて言った。

「見解の相違よ、私はそのように駭けている」

珠緒も負けていない。もともと相手が母親といえども負ける人ではない。

「もう、いいよ、おばあちゃん、鍵を失くしたのは、僕が悪いんだから」

学校の準備のために、2階に上がっていた敦也がいつの間にか降りて来て、久美子たちの話を聞いていたのか、突然話の中に入ってきてきた。

いつも、子どものほうが小さくなって謝る。これでは敦也が萎縮してしまう、何てイヤな終わり方なのだろう。

それにしても、珠緒との口論は、敦也と論がないくなくなってから、ゆっくりコーヒー飲みながらするのに、今朝は孫たちがまだ家にいる。何としたことか、彼らの前で激論を飛ばしてしまった。

「遅刻しちゃう、さ、ご飯食べましょう」と、敦也と論に元氣付けるように掛け声をかけた。

「鍵は、体につけておくには、どうしたらいいだろう、ズックの中、首につけるとか、カバンに紐でつけるとか」食事の終わり際に、久美子が提案したが、こんなこと何度も話題にしているのか、誰も返事しない。

敦也はいつものように、カバンのポケットに鍵を入

れて出かけた。久美子は、論に靴をはかせて、敦也への「イッテラッシャイ」の見送りをした。論は、見送りが好きだ。小さな靴を履いてチョコチョコと追いかけて、手を挙げて、「バイバイ」ができる。この言葉と「ワンワン」「マンマ、マンマ」が一番正確に話す。

後は、何を言っているのかわからない。歩くことはできる、スプーンを使う、人のあとを追うなど、いろんな動作を習得しているながら、言葉は遅れている、言葉が一番遅れるのだろうか、人の発達は不可解だ。靴下をはかない小さな足が愛しい。彼らが母親に叱られるだけで、自分の子が叱られている以上に悔しくなる。

久美子は、鶴巻の家に帰るまでに、洗濯、お勝手の片付け、部屋の掃除、そして、敦也の夕方のおやつまで用意して、10時のバスに乗った。

通勤時間を過ぎたバスには、遠方から乗ってくる中年の主婦が多い。足の悪いお年寄りと乗り合わせた。彼は、座るところがなくて立っている。バスが発車するたびに杖で支えているが、よろけそうになる。誰か椅子を変わってくれないかなと、周りを見るが誰もいない。中年の女性たちは、自分のしゃべることに夢中だ。その時、後ろのほうから声がある。

「あの席へ」おじいさんという言葉は消えているが、

中学生が席を立つてこちらに来る。

「ありがとう」とおじいさんは言つて座つた。

久美子はJRで、町田へ出る。新聞をゆつくり読みたいので、空いた席を探し、一両目の前列に座つた。走つて行く電車の線路がよく見え、考え事をするにはもつてこいの座席。頭の中に、敦也の涙と、昨夜、ソフトが売れたときのうれしそうな顔が交叉する。

「中古のものを売つてどこが悪いだろう、いらなくなつたものが売れたときのすつきり感と、新しいものを手に入れるときの快感は大人でも子供でも同じではないか、自分のものを売つてどこが悪いんだ」という負けん気が、胸にくすぶる火種を探していた。珠緒の母親を親とも思わない態度に、火種が燃え移つて、炎上し始めた。

次の週、敦也が学校から帰る前にと思つて急いで電車に乗つたが、すでに彼のほうが先に帰つていて、自転車はなかった。

急に日が短くなつた。急いでお勝手しなければと气持が急ぐ。日が短い分、外は寒い。15度以下だ。

今夜のメニューはカツ丼という彼のリクエストにあわせ、美味しいカツを揚げてもらつてきたので手間取つた。

珠緒が肉嫌いだからか、普通食べない肉への願望は強い。メニューは、すき焼き、餃子、ハンバーグ、カツ丼を繰り返す。

お勝手に入つて夢中で材料を揃えていると、玄関から、敦也が顔を出した。

「おばあちゃん、友だち入れていい？NOVAに行くまで家で遊びたい」

「後30分しかないけど、それでいいの」  
お邪魔します、と初めてみる子が2人入ってきた。

五年生にしては背の高い子と、ひよろ長い頭で、背の低い子。

五時過ぎると、外は暗い、家の中で、遊びたい気持ちは良くわかる。目の前で遊ばせれば珠緒に叱られなくても済むだろう。

何をしているのかと見るとカード選びだ。お互い所持しているカードの組み合わせかもしれない。

「あっちゃん、お友達は、同じクラス」  
「違うクラス、今日友だちになつたんだ」

顔見知りの子はどうしたのだろう、仲のいい子がい

たのに、なんか初めての子を家に上げるのは気になるが、敦也の頼みを断れなかった。ほんの30分程度だからいいやと思って許した。

一時、遊んだ二人の子は帰っていった。「お邪魔しました」と帰りの挨拶はできている。

6時までには、諭を迎えて、風呂に入れ食事もたっぷり食べさせた。良く食べる子で、出したものの全部食べてもまだ足らなそう、敦也に分けて置いた鳥の空揚げも食べてしまった。あとは歯を磨くだけだ。

しかし、NOVAに行った敦也が、8時過ぎても帰ってこない。心配になってバス停まで迎えに行つた。バスから降りる敦也は、生真面目な顔をして降りてきた。抱いていた諭とともに電柱に隠れて、目の前に来るのを待った。

ワツと驚かすと、彼も反射的に後ろへ下がった。「ビックリした」一歩下がって、意外そうに久美子を見た。

「驚かそうと思ってね」

諭のほうが喜んでいる。敦也はユーモアを解するほどゆとりもなく、眼は前を向いたままで何か気掛かりなことを引きずっている。

夕飯時、彼の好物のカツ丼をゆっくり食べた。サラダには野菜がたくさん入っている。

「美味しい」

久美子は、彼の気持ちを包み込むようにやさしく傍に座った。最後に飲む牛乳のコップまで揃っている。何でもかんでもやってしまうことは、珠緒から見れば気に入らないのだろう、久美子のやり方は子供の自立を妨げていると思っているから。

「うん、美味しい？」

この会話が二人共通の醍醐味であり、久美子への労り。

「あつちゃん、何か気になることがあるの」久美子は彼に視線を当てて訊いた。彼はむやみに首の回りを掻いていたが、素直に応えた。

「おばあちゃん、お母さんに何でも言うけど、僕、さっきの友達、家にしたこと内緒にしておいて欲しいんだ」

久美子は「どうして？」と言おうとしたが止めた。

あ、そのことを悩んでいたんだ、とやつと彼の気持ちが分かった。今日は知らない人を家にかけてしまった、それは母親との約束違反になる。友達を家上げる時には、珠緒が友達を知っている人か、必ず家に大人が

いること、と決められている。久美子も珠緒に言われているので、確かに気になっていた。

「もうしないなら…」と、確認した。

9時過ぎには食事も終わり後は好きなタイム。

久美子の最後の仕事は、宿題と明日の用意の確認。

「宿題も用意するものは何もない」と分かって久美子は、安心して寝付くことができる。時間は、自宅にいる時と同じ10時。

10時では居間は明るい。テレビはクイズ番組をガーガーと報じているが、久美子はアイマスクを常用しているので電気の明かりも人の出入りも気にならない。諭の背中を両手で掻きながら眠りにつく。どうせ敦也も久美子の傍で眠るだろうと布団は並べて用意してある。二人の孫と一緒に寝る夜は普段よりよく眠れる。孫にまといつかれて寝る暖かな気持ちで眠りを深めてくれる。

次の朝、久美子が泊まったせいも敦也が学校へ出た後に珠緒が起きてきた。彼女は総合病院の秘書室のサブリーダーだが、オーナーに合わせて長時間勤務である。帰りが遅い時は、朝の出勤が昼ごろになるから、今日もゆっくりするのだろう。

8時には、諭を保育園に置いてきたから、孫が出掛

けてしまえば久美子の用事はない。洗濯もキッチンもきれいに片付いている、ここでまたね、と言って帰れるのだが、それも味気ないとほこりっぽい玄関を掃いていた。

玄関が狭いわりには靴が多く、珠緒の夫の友和の大きな靴が揃えてあり場所を取る。京王線一本で出られる都心の出版社に勤めているせいもかいつ帰って、いつ出勤するのか、久美子にはわからない。「出張が多いだけよ」と珠緒が言うが、会社からこの郊外に帰ってくるには時間が掛かって大変、だからホテルに泊まることも多い。その連絡は珠緒のスマートフォンに入るとも入る。もちろん夫婦の朝食は、久美子の担当外だから帰っていたとしてもかまわない。玄関に靴が2足あるところを見れば帰っているのだ。そのうちコーヒーの匂いで起きてくるだろう。友和は娘と違って愛想がいいから気を遣わない、かえって彼の方が気を遣う。

「たまには、うちの母にも来てもらいたいが、遠いのでかえって面倒掛けるから、遠慮して貰っている」この言葉を久美子だけでなく珠緒にも言うらしい。

「言葉だけよ、ほんとうは共働きなんか理解できない、きつと友和君の自立度を見たら肝を冷やすでしょうね。うちのお母さんのように共働きの経験なければ、妻が

夜中に帰ってくる生活信じられないと思う」

いつも友和は、「敦也、論の二人はおぼあちゃんに懐いているから安心だ」と、お世辞を言う。久美子から見たら、婿の方が信頼できる。お世辞を言ってくれただけでも、瀬上に通う意欲がわく。娘の珠緒は、ありがとも言わないでいつも寝不足の浮腫んだか顔で不機嫌そうに起きてくる。その上、細かいことに気付き、包丁がシンクに置いてあるだけでも「あぶないわよ」と一言多い。前日から掃除をし、敦也の宿題までこなし、一晩、孫を守っているのに、彼女には感謝の気持ちがない。

珠緒の靴は指先がスパンコールで華々しく、エナメルも光っている。夫婦でありながら対照的だ。夫の方が一つ下だから、何でも自分のことは自分というように話しあっているの、久美子が磨いてしまえば、珠緒に叱られる。

「靴ぐらい、自分で磨かせなければ、共稼ぎはやっていけないわよ」というのが珠緒の流儀だ。

「お母さんコーヒー入れたわよ」と珠緒から声がかかった。

珠緒が食べ残した皿が載っているテーブルにコーヒーが出ている。湯気が上がって美味しそう。

「まだ、寒いわね、今日は午後雨かしら」

「敦也に傘もたさなかった？」

そう言えば、持たせなかった、

「持つて行けと言つても、キット持つていかないから、いいわよ」

「友和さんは？」久美子は友和の姿を見て帰リたかつた。

「出張で遅かつたから、今日は休みじゃな〜い」

それじゃ、起こすほどもない、「またね」と言つて道路に出た。

### (3) 娘と孫

長男の敦也が、中学校を卒業するその朝、久美子は前日の夕から瀬上に来ている。

半畳ほどの狭い玄関先で、珠緒と敦也がいつにもなぐ大声で口喧嘩はじめた。半分ドアが開いているから、すでに声が外に漏れている。

「卒業式の通知、本当に貰ってきたの」

「うん、貰つて来た、家に置いたと思うよ。その辺にあるんじゃないか」敦也は、靴ひもを結びながら軽く言つた。

「え、どこにおいてあるのだろう。見なかったよ」敦也とは違って珠緒は真剣だ。

傍にいて、一緒に見送るつもりでいた久美子は、「見ないわね、私も気にしていたんだけど」と何気なく言った。

外の冷たい空気が入ってくる。3月といえどもまだ寒い。午後には雨になるとテレビが報じていた。

「いつものことだから、通知文を見なければ何にも分らない。お母さん、卒業式、何時からって知っていた」と珠緒がヒステリックに叫んだ。彼女は、スリッパのまま三和土に降りて、敦也が出るのを防いでいる。寝巻の上にカーディガンをはおっているだけだから寒いだろう。

「知らない、だって私は行くつもりはないから、夕べ何も気にもしなかった」

珠緒を刺激しないように、柔らかに、彼女に眼を当てて言った。

「どこに置いたのだろう、いつも出かける間際に、こうなんだからいやになる」

返事をしない敦也に向ってとげとげしく怒った。彼は、それをも無視して、体の向きを変えた。

「中学の卒業式になんか出ない、いいよな」

出て行かせまえとして、珠緒はドスの利いた声を放った。

敦也は、何？というように見返した眼つきは強張って、いつものどっちでもいいやという温和な表情とは違っている。

「お母さんは行かないからね、いいわね」

珠緒の声が聞こえたのか聞こえなかったのか、敦也は勝手にしろと言わんばかりに母親の脇をくぐりぬけて外へ走り出た。

久美子はいたたまれなく、「一番いい高校に入ったという、おめでたい日に、何でしょう。時間だけならなら、学校に問い合わせましょうよ」

久美子はやさしく言ったつもりなのだが、

「いつもいつもこうなんだから、お母さん知っている、学校から貰った通知など、一度も私に見せたことないので、見たことないんだから」彼女は止まらなくなっていた。

「あんたが遅いからよ、出すタイミングを失ってしまふのよ。おめでたい日になんでしょう」久美子は、母親の威厳を取り戻して言葉を繋いだ。

「いつも、そう言って、敦也の肩ばかり持つ。おかあさんだって、私に言ったでしょう、そんなに勉強した



くないなら中卒でお嫁にいきなさいって」

「え、何それ、それとこれとは違うでしょう、お母さんは、勉強させたくて言ったのでしょよよ、その時は」  
久美子は急に30年前にさかのぼった珠緒の言葉に動転して口の中でくちやくちや言った。

「いつもここに来ると、喧嘩を見るのが嫌なの。敦也はいい子じゃないの、整理整頓が出来ないのは、性格よね。おばあちゃんも気にしているのだけど、片付けられない性分はおじいちゃんに似ちゃったんだ」

久美子は、珠緒から眼を外した。終始つかない成り行きに、すっかり嫌気が差していた。

出かけたと思っただ敦也がドアから顔を入れて  
「いいよ、いい。みんな僕が悪いんだから、おばあちゃん気にしないで」

心配で、出掛けられなかったのだろう、平らな言葉で、母親をなだめ、「行つてきます」と大きな声で、敦也は外へ飛び出た。湿った空気が一気に入ってきて、二人を冷やした。

中学生の黒い詰襟の制服は威厳がない、寒そうに風を切っていく。子どもは一生懸命頑張っているのに、と久美子はドアの外でしばらく見送った。

珠緒は、ブスツとした肉厚の顔、口を尖らかしたまま

また久美子の後から居間に戻った。

「卒業式のおめでたい日に、可哀そうに、高校へなんか行かなくてもいいって、すごいこと言うんだ」と、日ごろから胸にあつた言葉がすつと出た。珠緒が小さければ、平手打ちの一つもしたい心境だが、これ以上、強い言葉はでない。子供が大きくなるとどうして母親の権限でものが言えないのだろうか、いつも引いてしまつて後悔する。

久美子は口をゆがめただけで、次の手を打つて来ない。

珠緒は出産と同時に民間会社の総合職を辞め、敦也を育てながら秘書一級のライセンスを取った。これからの時代、女性は、ライセンスなければ仕事の継続は不可であるということを知った。それでも正規の秘書室勤務が、夜中までかかるとは彼女も就職した時まで知らされてなかったようだ。中学と小学生を持つ家事は大変。まして小学生低学年は学童クラブに7時までには迎えに行かなければならない。8時迎えの保育園よりも時間に縛られる。

昨晚遅く帰った珠緒は、よその親なら2時間かけている子供との対話をソ、ソと片付け、玄関から見送ってしまう。朝食も、身支度もみんな久美子に任せ、学

校に行っている子供のいる母親のスケジュールではない。久美子を頼んだ夜は、十二時過ぎることなどざらだ。

でも、久美子が批判をすれば珠緒は、「じゃ、もう来てもらわなくてもいい」と断わってくる。その言葉ほどでなくても、母親風を吹かせば、久美子は瀬上と呼ばれない。子どものためにならなくても、久美子を切る方を選ぶ。孫という人質を取られているようなものだ。もし、頼まれなくなった時に誰が困るかと言って、孫たちであり平等にローテーションを組んでいる夫の友和である。彼は、出版社に勤めているが、会社が自宅に近いこともあって、さらに分担を増やされ、子どもを迎えをしなければならなくなる

6月初め久美子は呼ばれた、3月、敦也の卒業以来だから2か月ぶりである。

高校に進んだ敦也が、久美子が担っていた水曜日の迎えを担うようになったので依頼はなかった。しかし、出張の多い友和や高校の補修で遅くなる敦也のピンチヒッターで呼ばれるのでスタンバイしていなければならぬ、生活でもあった。

敦也が高校に進んで3か月、諭は小学2年生になって、自分のことができるようになったせいもか家の中が落ち着いている。

瀬上に泊まった朝は、必ず、「ゆっくりコーヒーでも飲もうか」と珠緒に声をかけられる。40歳代に入った珠緒は、最近また太った。襟ぐりの開いたTシャツは、胸元までハート形に明き、きれいな線になっている。寝不足をカバーしても珠緒は秘書室の次席の貫禄がある。

きれいに片づいたテーブルにコーヒーが載っている。人がテーブルに座ると反射的に窓の傍に置いたハツカネズミも動き出す。チュツチュツと文鳥も鳴く。諭が一年生に入った時、彼が犬の代わりに文鳥とハツカネズミを欲しがり、世話をしている。友和の母親がプレゼントしてくれたもので留守宅が賑わう。諭が玄関に入った途端、メス文鳥は、大きな声で鳴く。久美子がプレゼントした、箱根から取り寄せたモモンガは、諭が帰ってもじつとつぐんだまうごかない。これがまた愛嬌があつて可愛い。夜行動物は、諭の大好物だ。

諭は、兄の敦也と違ってマメだ。学校へ行く用意もほとんど自分でできる。二番目というのは上を見ているからへましない。敦也と違って久美子を使うのも上

手い、今朝も鳥籠の掃除を久美子に頼んで出かけた。

「高校は、何で通っているの」

「自転車でもいいって。電車、バスがスタンダードだけど、回り道で、駅に寄る分遠くなる。自転車は直線だからね」

今朝見送っているとき、自転車にまたがったから、あれと思った。彼の高校までは、5キロ以上ある。自転車で通えるとは思えなかったのに、敦也は、自転車通学を望んだ。中学時代でも根性があつて皆勤で通したから、電車などまだるっこいらしい。彼は、言葉は少なく、不器用だが、やり通す何かを持っている。

「お弁当はどうしているの、朝早くで大変でしょう」

小一時間の距離だから、7時に出なければ学校は間に合わないはずだ。

「ほとんど夜に作ってしまうの、それに朝、ソーセイジなど加えて、持たせる。でも、弁当失くしてくるのと多くて嫌になっちゃう」

珠緒はマグカップを口にかけてゆきながら、飲まずにまた置いた。彼女の癖、首を曲げて考えている。

「弁当を、持って帰らないの。どうしてだろう……」久美子も一緒に考えようと首を傾け、気になる言葉を吐こうとしている自分を制した。

「私には分からない、今度お母さん訊いてよ」

ゴクンとコーヒーを飲みこんで、母にすぎる娘らしい顔になった。こんな顔をしてくれればいつも気持ちがいいのだけど、と思った。それに乗って久美子も母親の威厳を取り戻し、久美子の目を見据えた。

「食べなかった時は、弁当、わざと失くしてくるんじゃないかな。中学の時にもそんなことがあつた。家に持って帰ってお母さんに怒られるのが怖いからと」

「なぜ？」珠緒は、コーヒーカップを置いて久美子を見上げた。三白眼の眼は人を惹き付けるが、怒ると恐い。

「それは、何かの都合で食べられなかったからよ、美味しくないことだけでなく友達に誘われてとか」

久美子は、あつと思つた。これは話題にしちゃいけないことだった。敦也との内緒ごとだ。しかし、珠緒が前夜に作っているとは思わなかったので、それを聞いてしまつて、それじゃ美味しくないにきまつていると心にけしかけるものがあつた。

美味しくないということも禁句だったのに。何しろ、忙しい時間に作るので、彼女は冷凍食品ばかり使う。

冷蔵庫には野菜がいろいろ入っているが、その野菜を切る、煮る、炒める時間がない。冷凍のものなら野菜

だってチンすればいいのだ。それでは大人が食べても美味しくない。敦也は、美味しくないと言えずに悩んで、弁当箱を忘れたことにしているのだろう。

高校は中学と違って、学校の傍にコンビニも大衆食堂もある。パン屋も出店している、牛乳付きで安く手に入ると、敦也が言ったことがある。

「弁当持って帰らない日、どのぐらい」

「週1回は必ず。2回ある週はもう作らないからと、私は怒ってしまう」

その方が彼は喜ぶかもしれない。母親を怒らせて、弁当を作ろうとする脅迫観念を打ち破ろうとしているのかもしれない。

久美子は、弁当作れない時はコンビニ弁当でいいと思っているが、珠緒は母親の久美子が一日も欠かさず弁当作ったように、弁当に執着している。敦也は美味しくないなと思いつつ、でもと思つて母親に言いだせず、持つていく。しかし時間がたつた弁当はもつと美味しくない。子どもの食指は正直だから、食べないで、友達と一緒にカレー屋かコンビニで昼食を食べてしまう。そして弁当が邪魔になる。持つて帰れば母親に、なぜ食べなかったのかと叱られる。そこで、念入りにビニール袋に入れて高校のゴミ箱に弁当箱ごと捨

ててくる。もつと利口なら、中味だけ捨てるのだろうが、その現場を友達に見られたくないから、やむなく全部すててしまう、大体想像が付く。

「中学校と違って、高校は食事できるところいっぱいあると聞くよ。だから、毎日作らなくてもいいじゃないの、7時に学校へ出すには大変でしょう」久美子は妥協案を出した。

「それを言うなら、昔、私たちの弁当は、いつも前日の残り物、ひどいったらなかった。それも3種類ほど、5種類になったのは高校に入ってからよ」子どもは、昔のことをよく覚えてる。久美子はすっかり忘れていたというのに。

ああ、また砂利踏んじやった。珠緒としゃべるといつも行きつく先は、久美子の子育て時代の欠陥だ。自分では認めたくないことまで、娘から見れば欠点として洗いだされる。それに太刀打ち、言い合ひできるほど、久美子は子育てに自信持つていない。珠緒の前でどうしてこう、卑屈になってしまふのだろう。

「私は、お母さんの真似をしているだけだから」と言われるのが落ちで、言い返せない。だけど「そんなことはない」と言えば「私は、よく覚えている。お母さんは、私のことなんかいつも二の次だった」と見

事に言い返される。

「それは、華衣が小さかったから。それでもいつとも珠緒はうちの中心だったわよ」

と言いつづけば、彼女は、またきれいにやりこめてくる。

「私の方がよく覚えている、お母さんは悪いことはみんな忘れてしまう。華衣だってそう言っている」

妹の賛同も得ていると言われれば困みを突破することはできない。

急に、コーヒーが渋く苦い。珠緒は、子育てのことになると母親に負けじと喰ってかかってくる。職業を貫いた久美子をほどほどに尊敬しているようだが育児では裸にされてしまう。だから珠緒の手抜きと言って直させようとしても、かえってやぶ蛇になる、触れないようにするのがベターだ。が、時々今日のように敦也の欠点に話が入ってゆくとまるで自分の子を悪く言われているように珠緒と対抗してしまう。その結果彼女の内面に立ち入って、気の強い彼女を泣かせてしまう。そんな修羅場を何回か繰り返しているうちに、定期的に通う瀬上へのドアは閉ざされ、泊りの「お世話」は遠のき孫たちに会えなくなるのが落ちだ。

6月の半ば、珠緒に、敦也の弁当紛失のことで「ちやんと作ってあげなきゃ」と言ったことが因で珠緒に泣かれ、大喧嘩してしまった。これでもうお払い箱になる、きつと瀬上に行く予定は入らないだろうと、半分諦め、半分楽勝と思つて久美子は自分の予定に邁進した。8月には外国旅行にも行けたし、執筆活動もできた。やれることは何でもしたという日々である。いかに、いつ呼ばれるかわからない孫の子守に、長い年月縛られてきたのかと改めて思つた。誰にも拘束されないで自由に計画を立てられる、良さに羽根を伸ばした半年であつた。

しかし、ふとこのまま、「おばあちゃん」の出番がないまま過ぎていいのかどうかと心配になる。孫たちに、不信任を植え付けてしまうのではないかと気になりだした。孫たちも、それなりに気付いているだろう、母親から疎んじられた結果、おばあちゃんの出番がなくなつたことに。孫の成長に影を残さなければいいがと急に不安になりだした。

久美子は、自分の手元の計画がほとんど終つたことを一つの目安に、娘夫婦にメールを送つた。

「おばあちゃんに甘えられるときに甘えてください。」

孫が大きくなればご用済みになるのですから。手がほしいときはお互いさまです。私たちも年々取り、その時には助けて貰わなければならぬからーと言う内容である。そのメールへの返事はなかったで、まだ、きつと珠緒の気持ちは打ち解けていないのだと、半分あきらめ、このメッセージを最後に、もうアクションは起こさないと自分で決めた。

その甲斐があつたというのか、10月過ぎの土、日曜日の留守番を頼まれた。珠緒は仕事、友和は出張、敦也は学園祭の準備で忙しさが重なつた。

2年生の論を迎えに行くのは気が楽だ。彼は児童クラブにも慣れて、もう中ボスだ。

「論君、おばあちゃんが迎えに来ましたよ」

論は遊びに夢中だから、おばあちゃんの迎えも意に介さない。友達と追いかけてこしていて、なかなか久美子の方を見ない。

「遅くなるから帰りましょう」と担当者に催促されて、論はやつと帰る準備をする。ランドセルと手提げを持った手にさらに、靴と運動着の袋を持って出口に來た。「おばあちゃん」と言いながら、強く手に捕まる。眼がうるんでいる。久美子まで懐かしくなつて論を抱き寄せた。論の汗、青臭い。

家に着くまで、また論とおしゃべり。彼は友達のことを教えてくれる。

「今日は天気が良かったのでドッジボールをして遊んだ」「サトシは逃げるのが早いからボールに当たらない」「論ではないでしょう、僕よね」「うんそう、僕は、玉を取ることもできる、胸でぐいっと」「じゃ、2年生で選手になれるね」「選手はどうか、クラスにはもつとうまい子もいるから。今日もこれから、その公園で遊んでいい?」「いいわよ、何して遊ぶの?」「家のサッカーボールその壁にぶつけるのだ」「友達は?」「誰か来るよ。まだ約束して遊ぶ友達はいいけど」

公園の角を曲がると庭に花をたくさん植えている白い壁の家がある。この家の女の子と、論は同級生でその子の話に必ず入る。「キーちゃんはね。踊りを習っている」「どこで?」「このへんじゃない、市役所の方」「じゃ、遠いのだ」「親が連れて行くんだって、お母さんは家にいるから」論の関心はこの娘にあるのか、話が伸びる。

「僕、おばあちゃんに会うと何からしゃべっているのか、分らないぐらいいっぱいあるよ」

「なんでもしゃべりなさい。おばあちゃんも論としゃべるの好きだよ」

「あ、おばあちゃんの好きなゴーヤ、夏にはいっぱい垂れていた」

道端の網に絡まったゴーヤはシーズン終わって枯れて傍のトランペット・ツリーがゴーヤと同じ、いやそれ以上の強い臭いが鼻に突く。

「何個ぐらい」

「数えられないほど。だって僕、嫌いなもの」

諭がゴーヤの臭いだけは、好きになれないと言った。

「おばーちゃんは好きだな、チャンプーが美味しい、栄養があるんだ」

「僕は食わず嫌いかも。だってお母さん野菜料理作らないもの、肉も食べないし、だからヒステリー起こすのかな、ビタミン愛不足」

「え？」と言って久美子は足を止めた。ゴーヤから、ビタミン愛に転化するとは諭も文系で、久美子の感性と似ている。

角を曲がると散歩途中の、犬にばったり。また諭の好きな犬論に入る。しかし彼は久美子の手をほどこいて犬に駆け寄った。

「この犬、ダックスフントだよ、おばあちゃん知ってる」犬に慣れているのか長い背中を撫でながら、久美子を見上げる。長い背中を久美子も膝を折って諭に

合わせた。

「そのくらい知っているよ。おばあちゃんの家でもお母さんが小さい頃はシバ犬を飼っていたし」

「僕、犬飼いたいな、でもお母さんは絶対に飼っちゃいけないと言うから飼えない」

「でも、ブンチョウもモモンガも飼えただけでもいいよね」

「本当は、外で飼えたいの、犬と走り回りたいの」

ダックスフントは、ちょこちょこ足を揺らしリードで引つ張られていく。

やっと家に着いた。諭が持っている鍵で入った。彼は鍵を失くさない、兄が叱られるところを見ているので、珠緒に叱られるようなへまはしない。しかし、久美子の前では投げたり放ったりする。彼は、カバンを放り投げてすぐに、「行ってくるね」と言うよりも先に、走り去って、姿が見えない。

西風が出てきた。月がなく、雨模様だ。久美子のこれからが忙しい。

ポストから手紙、夕刊を出して、生活協同会から届いている食料を玄関内に入れる。

諭は、7時になれば足元が暗くなるので、束の間の遊びだ。

「おばあちゃん、夕飯はなに？」と言って戻ってきた。手を洗つてと言う前に彼はゲームを始めた。

「夕飯までに宿題をやつてほしいんだけど」という言葉は口の中だけで言葉にならない。顔見れば宿題、宿題という、おばあちゃんの役割は捨てようと殻を破つた。

「それは、論ちゃんの好きな鉄火井よ。お兄ちゃんには、シヨウガ焼き」

「いいな、僕もシヨウガ焼きも食べる」  
「はい、どうぞ、肉はたくさん買ってきたから」

孫二人の食事は、もう長年やっているので、慣れたものだ。特に肉中心の食事。久美子は地元の肉屋から肩ロース、700グラムも買ってきた。お兄ちゃんに400、論が200、久美子の分は100グラムという目安。

「お兄ちゃんの帰り遅いよ」論は思いついたようにしんみり、久美子の傍に来て言う。久美子の胸元に届く彼の頭が、なぜかききな臭い。どこかでたき火をしているんだろう。

「いいよ先に食べてしまおうね。お風呂を先にする、それとも後に」

「おばあちゃんは先に入りたいんでしょう」

「先に入ってゆっくり論ちゃんと食事したいな」

本当は、論も先に風呂に入りたいが、彼はテレビゲームが優先だから、しょうがない。

久美子は、最後のフルーツまで用意して、風呂に入る。こんなにてきぱきと動けるのは、瀬上の家に来た時ぐらいいだ。家での調理は、おかずの2品でさえ本心億劫である。これは不思議な現象で、体が重い。それなのに、孫の食事はトントンと軽快。動くだけでなく、この仕事がうれしい。なぜかいつも思う、キット待ち切れないほど待つて食べて、美味しいと言つて食べてくれるからだ。じゃ、自分の子どもが小さい時ほどうだったのだろう。責任があつて、もつとたくさん作らなければならなかったのに、あまり料理していない。どうしてなのだ、この気持、弾む気持は久美子が老いたからなのだろうか、それともたまに、だからなのだろうか、答えない疑問を自分に出して、すぐ忘れる。

夕食は、論相手にビールを飲む。ビールと彼のおしやべりがまた楽しい。暑くも寒くもない季節、生活は楽だ。

「おばあちゃん、この鉄火井美味しいね」

論はマグロに包んだご飯を舌の上に乗せて口を閉じる。頬が膨らんで、いかにも達人の食べ方だ。見えて



て気持ちがいい。

「それは良かった。イオンで新鮮なマグロを買ったのだからね。諭ちゃんはイカやホタテが嫌いだと言っていたから、サーモン、ハマチを入れて貰ったの」

スーパーの刺身売り場には刺身がたくさん並んでいる。その中から新鮮で食べやすそうなものを選ぶ。小売りの魚やでは、これだけの生魚はない。久美子は眼を利かせて一生懸命選んでくる。

「ありがとう、おばあちゃんは僕の好みに合わせて、作ってくれる」

片手を挙げて万歳する、バンザーイと。

「諭が美味しいと言ってくれるから」

「本当に、美味しいもの」

諭は、まだ8歳だが、食事は大人顔負けだ。鉄火井のほかに、シヨウガ焼き、サラダ。その上、ウインナーの野菜炒めまで食べる。その食べ方も半端じゃない、次々と口の中に入れる。黙々と、という感じだ。兄の敦也も同じだった。美味しい食事で、孫の気持を満足させられれば他愛ない。久美子の作ったものを黙々と食べる、その様子を見てると嬉しい。

諭は、食べ終わると、さてと言うように久美子を見る。

「次に何をするんだっけ。勉強、それともお風呂」

諭は立ち上がっていた。いつもより2倍は食べて口のまわりに食べカスを付けている。久美子はシンクの中に入れた茶碗を洗いはじめた。傍に来ている彼は甘えた声でささやく。

「おばあちゃんこそ聞きたいよ。何でしょうか」

「僕は、8時までテレビ観たい」

「8時まで見るとしたら、おばあちゃんの見たいニュースは、どうするの」

「そのときは風呂に入っているよ」

「おばあちゃんは、ゆっくり落ち着いてテレビを見たいな、一緒に見ようよ」

テレビを見ながら寝かしつけない。放っておけばいくらでも夜更かしをする。母親が働く子特有の夜更かしだ。今晩はどうしても10時まで寝かせてしまいたい。

しかし、彼は、次の要求で、背中を「掻いてください」という、久美子に背中を掻いてもらうのが楽しみの一つ、これだけは母親の手では駄目らしい。手を広げて頭の毛から背中、そして太腿、最後は足の裏まで、要求は高まる。

「マッサージ代、千円」と手を出すと、

「出世払い」と、どこで覚えたのか、粹なことを言う。

論の方が上手だ。

孫の面倒見に通ってきた15年前から、久美子と孫たちは、居間に二組の布団を敷いて眠る。朝までに何回か分らないほど、その上、目覚めては、彼らの上掛けを直す、寒くても毛布が掛かっていたためしがない。

暮れになっても今年は瀬上来ないだろうと、思ったので気になっていた洗濯ものを沢山洗った。ドラム式の洗濯機は、洗濯ものの多少に関係なく、時間がかかる。乾燥まで入れなくても1時間。3回まわせば3時間だから、二泊の日にだけシーツ類を洗う。さらに、敦也の学校のものを洗う。

珠緒は遅番で、11時に家を出ればいいというので、久美子はコーヒーに付き合った。その間に、昨晩干しておいた洗濯ものが、部屋の暖房で乾いた。何しろここは、床暖房に、エアコンまで使っているから、一晩でバスタオルまで乾く。久美子は、瀬上での家事は一番で洗濯をする。昨晚も3回している。

久美子は、最後の仕事と、洗濯ものをたたみはじめた。手持無沙汰の珠緒が何気なく、寄ってきて一緒にたたむ。

「アレ、お母さん、バスタオルが真っ白だね、ホワイ

ト使ったの」と、彼女が珍しく質問してきた。

「白いものはみんなホワイトに浸してから洗ったのよ」

「だからか、いつもよりきれいだと思った、どうしてなの」とまた訊く。彼女の気持ちだが、いつものツッパリと違う、素直だ、更年期が直ったのだろうか。

「白いものは白いものだけで、バスタオルとタオルは一緒に洗ったの、色ものと区別して」

「どうして、洗濯機に入れればみんな同じじゃないの」  
「特に白いものを白く仕上げるためには、白いものだけで洗うの、そうしなければいつの間にかグレイに変色してしまう、この家のタオル、みんな変色しているでしょう」久美子は、いつも頭にあつた「こだわり」が一気に出た。母親の威厳まで持つてはつきり話す。

「敦也のYシャツは全部、ホワイトに浸けて洗い直したのよ、きれいでしょう。色ものはそのままに洗ったが、靴下だけは手洗いし別洗い」

「どうして、そこまでやるの」という声で、珠緒が尖つてきたのが分かる。

珠緒は、特有の畳み方、ぐるぐる巻きを止めて立ちあがってしまった。

久美子は、彼女の陰悪な雰囲気気付いたが、どう

せ此処まできたからには最後まで言っつてしまおうと続けた。

「このドラム型洗濯機は、水の省略にはなるけど、色が混じってしまうのよ、だから白いYシャツが真っ白に仕上がらない、みんな色が付いているでしょう、白いものが茶色に」

「……」

「敦也のYシャツと下着は白く仕上げてあげなければ可哀そうよ、キット敦也も悩んでいるでしょう、恥ずかしいと」ここまで言う必要はなかったろうが、彼女が一番苦手の言葉を投げかけた。

この際と、久美子はいままで、言うことのできなかつたドラム式洗濯機のみスマッチを教えた。

「私の洗濯が悪いというの？」彼女はいったん立ちあがったが久美子の言葉に負けてまた座りなおした。床暖房が利いて暖かいのに、久美子は、一瞬冷たいものが走った。が、何かに挑戦するように言葉も選ばず早口で彼女を押さえこんだ。孫のために、珠緒のために、白いものを白く洗う、洗濯の仕方を教えなければ、いつまでも後悔する。これは久美子の役割だ、逃げてはいけない。

「そうじゃない、白いものは、白いものだけで洗わな

ければ色が染みてしまう、と言っているだけ、珠緒が知らないから教えているの」

「そんなこと知っているわよ、でもそんなことしてられないの。毎日戦争よ、洗濯は小一時間かかるんだから、一回では済まないでしょう、二回やる時間などないの」

「乾燥機が付いているでしょう、色ものは汚れているから普通に洗って、白いものは乾燥機を使う、そうすれば明日には乾いている。でも白いもの、色ものと一緒に置きにでもいいじゃない、白いものは、色ものとは一緒にしない、これは鉄則よ」

「そんなこと言ったって、大変なのよ、男の子は汚すから、バスタオルも4枚も使うし」

「バスタオルはどっちでもいいけど白いはずのシャツや運動着が、どれもこれもグレイじゃない、私まで哀しくなる」

そんなこと言ったって、と珠緒はまた言った。久美子は無視した。これだけ言えば彼女は怒ると思っていた、その通り本気で怒っている。怒らせない言い方があったのかもしれないが、しようがない。ここまで核心に触れてしまったからには、後戻りはできない。怒らせても孫の品格のためにも白いYシャツで学校へ行

かせたい。久美子が珠緒に、家で教えてなかったというなら謝りたい。きっと昔は、洗濯機が原始的で水をジャージャー使っていたから、だから白いものは白く仕上がったのだ。

珠緒に、敦也の白いYシャツが鼠色にくすんでいることを、長年気づいていて忠告しなかったのは、母としての久美子の怠慢である、これで珠緒との仲が悪くなってもしょうがない、もう後戻りはできない。覚悟のことで、プライドの問題ではない。

思った通りその後、正月過ぎても諭の迎えの依頼がなかった。6か月間も遠のいたのは瀬上に通ってからはじめてだった。

土曜日、児童クラブで顔を合わせたときには、「おぼあちゃん、ボク、明日友達と約束してあるからね」と諭が真っ先に話す。

諭の約束は、かなり肝いりらしく、彼のハイテンションで伝わる。どんな約束なのか、誰と行くのか順次聞き出すと、学校から家に着くまでに様子が分かった。

「『い』で遊ぶの」

『ふれあい』だよ、学校の傍の青い網が張ってあるだろう、あそこに10時」

学校の近くにかなり大きな広場がある。フェンスに囲まれ、いつも子供たちが球技をしている

「いつもの友達と約束したの」傍に立つ諭の背中が細長くカバンが小さく見える。彼は、父親の友和に似て身長が伸びるだろう。まず、手足が長い、じき久美子を追い越す。

「明日は4人、マア君、カイホウ君、ナオキ君、とボク」久美子の手を離して、右手の指を折る。

「よかったね、友達が出来て」  
「そうだよ、もう3年生になったのだから」

諭には半年近く会っていない、彼の生活環境が変わるのは当たり前だ。

「約束、約束」と諭はそらんじながら久美子の前でスキップする。

諭の手を取ってみると暖かい。

「手が暖かい、どうして？」久美子の問いに、諭は、振り返って彼女の傍に戻った。

「ボク、おぼあちゃんと久しぶりだから、うれしくて、おしゃべりしてしまうんだ」声まで弾んでいる。

「諭、さびしかった？」

「ウン、おばあちゃんのことお父さんと話すと涙が出たんだよ」

「どんな話」

「おばあちゃんが、正月から、なぜ、来ないの、とお父さんに訊いたんだ」

久美子は、論がなにを言おうとしているのか、だいたい分かるだけに相づちを打つ言葉がない。

「お父さんは知らないって、でも僕は知っている、洗濯のことでしよう、お兄ちゃんのYシャツ白く乾いてない、とおばあちゃんに言われたと、お兄ちゃんに当たっていたから。お兄ちゃんは何にも知らないからポカーンとしていた。僕だけ知っているんだ」

久美子は、論の声が聞こえないふりをした。論は、ちよいと久美子を見上げ、彼女の心を読めたように手を振って逃げ去ってしまった。

久美子は、去年の暮のことを思い出していた。白く仕上げたはずの洗濯ものがグレイになっていることを批判して、珠緒と喧嘩してしまった。かなり彼女を傷つけたのだ。結局この半年間、孫の顔を見ることが出来なかった。

論が、また久美子の手にはぐら下がった。久美子は論

と手をつないで歩きたくてしようがない、この時間が至福の時だった。もう、3年生になったのだから止そうと思うのだが、また「お手手つないで」歩きたくなる。

「おばあちゃん、このごろ来てくれないよね」同じことをまた言った。

「そうだね、お母さんから面倒見と、いうメールがないからね」

「お母さんが？」

「お母さんが来てくれと言わなければ来られないから。論ちゃんは独りでもお留守居できるので、お母さん、安心しているんでしょう」

「お父さんが、2年生の3学期だから、児童クラブの世話にならなくてもいい日を作ってくれたんだ。それだけ迎えが少なく済むでしょう。週2回は友達と帰ってくる。そのあと家で一人で留守番しなさいと言われた」

友和は、久美子を頼まない事情を察知して、2年生の3学期から、論が独りで帰れる日を作った、だから、論は、家にも独りで帰れるし、独りで留守番も出来るという、集団下校していることが分かった。論は、久美子に会いたくても、母親に気を遣って会いたいとい

えなかったのだ。

「友達に、曾バーちゃんがいる人いるよ。バーちゃんと曾バーちゃんって何人になるかな、いっぱい」

「おばあちゃんの家にも曾バーちゃんはいたけど死んじゃった。今元気でいたら100歳過ぎてる」

いつも通る女の子の家の前も先に走っていきそうな彼を制して

「足長くなったね」と話しかけると、彼は、振り向いて片足を高く挙げた。

「ボク、滑り台に足が付くんだ。だからきつと10センチは伸びたね」

「独りで帰れるようになって良かったね」

「でも家に独りでいるのは詰まんないよ、だって母さんは9時にならないければ帰らないんだもの」

諭は、独りごとのようにぼそぼそ言っている。久美子の前でなければぶつけられない言葉だ。話をしていて間に家に着いた。

夕飯は、諭の大好物の鉄火丼。ポテトとウインナーのアラビアータチーズ焼き、そのほかコロッケ、鳥のから揚げを惣菜店で買ってきた。ジャガイモサラダはいつもの通り、久美子は家から持ってきたもの。軟也がいない食卓は何をならべてもさびしい。彼は進学の

ために塾帰りが10時になる。

「諭、今晚から別に寝るようかしらね」と提案した。諭は何を言われたのか分からず考えていたが、

「おばあちゃんと一緒に寝るほうが布団省略できるよ、今晚は二人だけだから、僕とおばあちゃん1枚で間に合うし」

「それもそうね」二人だけだから、同じ布団に寝ようという彼の言葉はいい発想だ。誰も傷つけなくても済む。

もちろん、寝ながらぐたぐたと背中を掻かされる。両手でパーの字で。これも彼の戦略、一晩に3、4回も。これで一番得しているのは諭だ。

次の朝、諭は「約束」と何回か言いながら起きた。まだ7時なのに、電話をかけるかどうかどうしようかと迷っている。

「もう少し後、8時過ぎのほうがいいよ」

「友達、忘れていないかな」と気にして、落ち着かない。

「どうして、心配なの、約束したのですし」彼はクラスメートの名簿を持った手をひらひらさせる。

「うん、そうだけど、昨日は土曜日だった。その友達

は児童クラブに来ていないから、忘れてしまったかもしれない」

諭の頭の中は、約束でいっぱい。

「忘れられちゃ困るよ、僕初めて約束したんだから、守って貰いたいな」

「忘れた人がいても怒っちゃだめだよ」

一階は、広いワンフロアー。テレビが置いてある方には、半分カーペットが敷いてある。リビングらしく健康器具、バランスボールがあつて何でもできる部屋だ。

「8時になったら電話するから、そのとき言ってね」

8時に電話するまで、諭にとつてはひどく長かった。テレビゲームに手は置いているが、その割には気が散つてしょうがないらしい。

やっと、8時になった。諭は、壁に掛かっている電話番号をプッシュする。一番先はマア君だ。

「マア君、今日遊べるよね、おととい約束したでしょう…」

諭は一生懸命説明している。言葉がつつかえ、つかえだが、途切れても、催促に一生懸命。

「でも、ボクは約束したからね」と念押しする。

マア君は忘れていたのか、今日は都合つかないと言

っているのか、それとも親に話してなかったのか、時間が掛かる。結局、マア君は、母親と買物にいくと言うことでだめになる。

2番目に電話をしたカイホウ君も都合が悪い。そして最後のナオキ君だけが約束を守ってくれた。やり取りを傍で聞いていて、久美子は諭のリーダーシップに感心する。一人、一人、どの子も三年生だから家族が出る、その中で友達を呼んで貰つて、今日の約束を確認する。諭がいつの間にか、友達と約束つけるようになったことに感激。努力の成果に拍手したい

「一人になったけど、大丈夫。遊べるの」

「うん、みんな日曜日は予定があるんだ。金曜日に約束したから、しょうがないや。約束ないのは僕ぐらいだ」と、めげることもなく、言い切る。両手を羽根にして、パップと飛んで久美子の傍に来る。彼女は、いい子いい子と頭をなでてやる。

「じゃ、行ってくるね」と水筒の入ったリュックを背中にひょいと背負つて、飛び出て行った。自転車のわっぱも取れてすっかり小学三年生。

友達の中では背が高く、ひよろひよろしているが、もう、おばあちゃんを相手に遊ぶ歳ではない。いつの

間にかと感慨深い。一足飛びに大きくなり、友達と約束が出来たようになった。

昼に、遊び疲れて帰ってきた。ジャンパーも手も、顔まで土埃で汚れている。この洗濯は、下洗いしなければ洗濯機に入れられない。

食事をしてもまだまだ遊びたそうだ。

保育園時代の友達は、家の近くのので予約しなくても遊べそうだと、自転車で見に行っただ。

「家に入れていいかな」と訊くのでこの寒さでは家の中のほうがいい、「どうぞ」と居間に通した。諭は、友達の方にびったりくっついて、ゲームを交互に遣り合っている。この子は久美子も知っているので安心。遊んでいるときにはおばあちゃんもおかあさんも要らない。

「半年でこんなに変わるのか」と、目を見張るばかり。おばあちゃんにくっついていた彼の姿はない。ソファから長い足を投げ出して、リモコン操作している。テレビ一台で、彼らは幾通りの遊びもできる。やりとりの言葉もなく、もちろん喧嘩もしない、ただゲーム機に向って叫んでいる。

久美子は、洗濯も万全、夕飯の食事もできた。風呂だけは入っていないが、諭はまだまだ、久美子の方を

見ないだろう、彼が月曜日に持つていく荷物を揃えて玄関を出た。友和が一時間後には家に戻るという電話に安心して。

#### (4) 娘の家族

十月、夏休みも終わって、小学校の作品の発表会、高校の文化祭など久美子が、祖母の役割と任じ、参加する日も多くなった。学校の行事では祖父母まで参加するのが通例になっていた。

一泊したいもの朝と同じように、諭を学校へ送り出して、用事のなくなつた久美子は、帰ろうかな、と急かす気持ちもあつたが、最近珠緒とゆつくり話していないことに気付いた。たまには珠緒との会話も大切と、コーヒーに誘われた椅子に座つた。

敦也たちのことを一通り報告して、さて帰ろうかなと立ち上がった時、

「お母さん、敦也に、おじいちゃんのアスペルガー症候群のことを話したんだってね。敦也が、確かめたかつたのか、私に訊いてきた」

珠緒は、言おうか、言うまえか、躊躇していた言葉だつたのだろう、久美子がさつと立ちあがったので、



追いかけるように口火を切った。

それは、一か月ほど前、敦也の部屋があまりにも散らかっていた時、

「文化祭で忙しかったのは分かるが、こんな中で生活していたのでは、将来独り立ちができないよ」と話しかけた。言ったついでに、『あなたのおじいちゃんも部屋の掃除、洋服、下着のかたづけ、一切できない。今流行りのアスペルガー症候群かもしれない』と言った。独り立ちしたいなら、片付けを覚えなさいと言いましたよ、それがなぜ」

久美子が、夫のことを娘の珠緒に相談もしないで、敦也に言ったことは浅はかだったかもしれないと、良心がとがめていた矢先、そのことをズバリ娘に衝かれたので、言い訳がましい言葉になった。

「敦也にはショックだったらしい、だってあの子おじいちゃんが大好きで、本をよく読むと尊敬しているもの」

珠緒は、大上段に物を言う。なぜ、そこに立ち入ったか、母親の心情を理解しようとしていない。久美子は敦也に遺伝することの怖さを感じていて、彼と心の距離が近いうちに、言っておきたかった言葉だ。しかし、珠緒には理解できないかもしれない。

「いいじゃないの、おじいちゃんはよく本を買ってくる。頭もいいし、そして物知りかもしれないが、その本を一冊といえども片付けられない、知っている、みんな私が片付けているのよ。でもね、そのこととアスペルガーは別、もっと本質的な問題。敦也が片付けられない性質を私が見抜いているから、間接的に言ったの」

夫が並べておく資料の山を見せたい、B4の紙に新聞紙、資料が山と積まれ、部屋中並べる。会議の資料は、10年目だろうが、20年前だろうが溜まる一方。メモ紙一つ捨てられないのだから、時間がたつてしまつて、必要性の再認識さえできない。本人は、いつか使うだろうと、メモ紙一枚捨てずに取っておく、捨てるのが出来ない、おかしな性格だ。資料はいつの間にか臭くなり、部屋はデッドスペース化して、歩く場所もなくなっている。

「知らなかった。私は、博学のおとうさんをいつも自慢している。書斎だけでなく図書館までお母さん作ってあげているから、自分でやっていると思っていた」

珠緒の手にしたテーブル拭きが、全然動いていない。母親には批判的で、いつも容赦しない娘が父親のことは盲目的に仕事ができると思いきこんでいるから不思議

だ。

「お父さんは何もかも置いておくだけ、一切、整理は出来ない。客間の畳の部屋は書類でいっぱい。全部積み重ねていくだけ」

「いつから」

「結婚した時からよ、その時から長年、全部私が入っている。仕事を終えたときにはお父さんのもので8畳と6畳の間がいっぱいになってしまった」

「知らなかった」

「知らなかったのではなく、父親に関心がなかったのだ、それとも高校卒業まででは見ていないに等しいのだろう、と久美子は思った。

「だって、あなたなんか、高校卒業して、ほとんど家で生活していないでしょう。高校の時だって、部活だ、セミナーだと言って家にいない。大学も下宿、就職も都心にアパート借りて働いていた。両親の本当の姿を見る間もなく結婚した」

「でも公務員のお父さんは尊敬していた」

「尊敬と、お父さんの欠陥は別。敦也がおじいちゃんに似て、整理整頓のできない子になってしまったらどうするの、キット民間のサラリーマンは無理ね。今から整理整頓の必要性を教えていかなければ、必要なら

治療も。だって、お弁当箱年中失くすんでしょう、カバンも。底に古い資料がどんどん溜まって行く、通学のカバンひっくり返したことある、いつもいっぱい、何が大事か捨てることもフアイルすることもできない。これはアスペルガーの人特有のもの。それだけでなく、敦也も勉強しなくても、一回聞けば覚えてしまう。受験勉強しなくても、きつといい大学に入るよ、これもくせもの、お父さんに似ている」

「珠緒は脇を向いてしまった。この病気のおぞましさを知っているのだ。

「敦也には、いつも言っている、でも言うことをきかないし、書類も見せない」

「だから私が悪者になって、おじいちゃんの例で言い聞かせたのよ」

「私がやるわよ、自分の子だもの」

「でもおじいちゃんは、私の夫、私が一番知っている、早期発見で直したいわ、それよりも孫にまで引き継がせたくない。私は敦也の自覚を促してみたかったの、あなたでは駄目、大上段にものを言うばかりで子供のいい分など聞かない」

「じゃ、お母さんは私の言い分を聞いたとでもいうの」  
ああ、またせっかく軌道修正が出来て半年、つつが

なく毎週孫の面倒見に通いたのに、また砂利を踏んじやった。もうおしまいにしようと思つた矢先なのに。

珠緒の欠点に話が進んでしまった。この一言で彼女は、自分を失う。久美子への一斉射撃。珠緒は自分で自分が制御不能になってしまうのだ。彼女こそ、父親に似た、こだわり症候群。

「私はお母さんに可愛がつてもらつた覚えがない」

久美子は、エツと思つた。

「あれをやれとか、これをやれとか、いつも命令されてばかりいた。学校の行事だつてマチヨウに来てもらつていない」

ここまで、勢いよく流してきて珠緒は一呼吸した。いつも同じ流れにたどり着く、心の底から久美子への不満が爆発する。

何か言おうとしても「私の言うことを聞きなさいよ」とテールを叩く。お母さんは何も聞いてくれなかつたじゃないかと威嚇するばかり、話にならない。怒りで据わつた眼が久美子を睨んで夜叉のようだ。知性のある声が急変して一本調子。

久美子はどう相對したらいいのか言葉選びもできず珠緒の剣幕にうちのめされた。中身を吟味している余裕はない、が、感情だけには不思議に冷静でいられた。

「私がなんか言おうとしても取り合つてくれなかつた」

「珠緒、それは被害妄想だよ、お母さん何にもおぼえていないもの」

「だからいやなのよ、そんな風に曲げて取るんだもの、じゃ、私がウソを言っているようじゃない、華衣に聞いてみな、私と同じことを思っているから。彼女は大人しいから言わないだけ、指しゃぶりで結構大変だったのでしょう、その癖は手をかけてもらえなかつた証拠よ」

珠緒にはお稽古ごともさせた、いい洋服も着せた、旅行にも連れていった。不自由させるとしたら、ウィークデイの学校行事には、出席できなかったことぐら이다。

「親不幸もの」と怒鳴りたかつたが理性が遮つた、言えばもつともつと出てくる。しゃべるのも哀しくなる、娘にやつつけられた悔しさがこみ上げ、思わず目頭を押さえた。久美子が泣くことはないのに、胸がいつぱいになって涙が溜まって流れていた。

「職場や家の中のストレスを、対象を変えて母親にぶつけているのかしら？」と訊いた。

「お母さんって、またそんなことを言う。私の記憶は

正確だからね」

「そう、鶴巻の家も、お母さんも嫌いなんですよ。いいじゃないの、嫌いなら嫌いで。お母さんにつらい思いをさせられたと言うならそれもいいでしょうどうぞ、気の済むままに」

珠緒の訴えを、久美子を取り合つてくれなかつたという残像は、はたしていくつの時からのものだろうかと考えた。子どもが3人になつても、久美子は仕事をやめなかつた。その生活は想像を絶するほどハードだつた。確かに2人から3人という数字は1.5倍でない、人間の手が2本しかないように3人になつた時は倍以上多忙になる。ひとりが風邪を引けば一気に3人になる。耳鼻科、歯医者はいつも3人をまとめて連れて行つた。珠緒独りの時はゆとりがあつて、かえつて甘やかし過ぎたと反省している。華衣が生まれ、2年目に長男が生まれた、珠緒のいうとおりである。次女は指しやぶりと耳たぶつかみは重症で、これは全く構われない子特有の癖であつた。離乳食も食はず、栄養状態も悪かつたので、キット知的障害になるだろうと思つていた。しかし、その心配は杞憂で彼女は元気に育つていた。かえつて面倒見た方が、甘えがあるのか、母親を負かそうとする闘争心でくすんでいる。

何もやつて貰えなかつたという貧しい発想で、母親に喰つてかかる、まるで悲劇の女王のような珠緒にすっかり嫌気がさして、好きなようにどうぞという気持ちになつた。ばかばかしくて訂正も言い訳もしたくない。珠緒との関係は会話の通じない他人よりもひどい。「じゃ、帰るね」久美子は、平静な気持にはなれなかつたが、声だけは年の功で平らに出た。バックを取り上げて居間全体を見直した。全部片付いている、安心だ。

「おかあさん傘」と、いう彼女の声が聞こえ、振り向いた。見送られたとは思つていなかったので意外だつた。彼女は郵便ポストの傍で久美子を見送っている。

珠緒の眼を見た。先ほどまで激昂していた眼が穏やかになつて、口元をゆるく開け、なんか言いたそうにしていたが声は出ない。

空を仰ぐと厚い雲が広がってきた。これではいつ降つてもおかしくない。

でも戻る気はしなかつた。珠緒にやり込められて外に出た悔しきで涙が止まらなかつたから、きつと顔はひきつっているだろう、とても合わず顔ではない。

「言いたい放題に言つて」と言えば、また喧嘩になる。ここは歳の功で気持ち鎮めて、さよならと手を挙げ

て振った。彼女が手を挙げたかどうかは知らないが、久美子が歩きだしてもまだそこに立っていた。

彼女は、最近はまだ肥ったのか、肉厚な頬で、二重の顎にシャープさががない、もたつく中年肥り。心も欲求不満なのだろう、当たるところがないので「母親にぶつける」と、まるでボクシングのジアブの痛みを味わった胸を抱くように歩きだした。

いつも思うことを思った。珠緒を産んだ時、いったい誰に似たのだろうと言われたぐらい美形だった。珠緒が中森友和と婚約した時、久美子は、スペイン旅行をプレゼントした。母娘で海外に行ける、初めてで最後の旅行になるかもしれないとかなり奮発した。その時の珠緒は、仕事を辞めて結婚に向かっていたせいかわるさが眼に出て美しかった。ツアー仲間から、本当に親子、キットお父さん似なのではないかと言われその言葉に久美子は「エ！」と思った。

あの頃の珠緒は素直で素敵だった、そう、山口百恵に似ていたが、今はその面影もない。きつと内面の表情を映していたのだろう。彼女の最高の時期だったのだ。その後、家にいることができない彼女は、秘書という業務に見つけ、やり遂げている。しかし最近の彼女は、職場ではどんな顔をしているのか、その反動で

家にいる彼女は肌も濁ってヒステリックな小母さんタイプ。更年期ばかりではない、職場のストレスを抱えているのだ。とすると今の表情は職業病かもしれない。

門を曲がったとき、いつも見かける情景に出会った。二軒先の家も珠緒の家と同じように道路路際に玄関がある。

女の子のいる家の庭には洗濯物が干してある、真っ白いブラウスが風で揺れ、レースの白い靴下も。

三歳ぐらいの女の子が玄関先で母親に向かって大泣きしている。

「イヤダカラ！」キーという感じの声、大人に有無を言わせないほどよく響く。久美子は思わず足を止めた。久美子だけでなく、誰でも動物的な声に一旦は、足を止めるだろう。

「じゃ、どうするの、行かないなら、行かなくてもいいわよ」

母親は諦めているのか、娘にというよりは、自分に言っていた。

太い脚の女の子は、言葉で言いきれないのか、地団太踏んだ。白地にピンクの線が入ったヒラヒラのソツ

クスと靴は人形みたいに丸い。短いスカートからパンツが覗いている。

下向きの母親の顔は見えないが、子どもと同じように素直な毛が首筋に垂れている。女の子に本気で怒っているのか、睨んでいるように動かない。

「お母さんは、お母さんは」と地団太踏んで泣き叫ぶ、女の子の方が強い。

ことによると、お稽古に行きたくないと、ダダをこねているのか、それとも着ていきたい洋服があつてそれを着せて貰えないから泣いているのか。

久美子は、その場に立ち止まったが、よく見かける光景なので、通り過ぎようとした。しかし、今は不穏な気持ち胸に溜まっているせい、足を止めてしばらく様子を見ていた。

あの母子の対立は、どんな形で子供の心に残るのだろうか。「お母さんにいじめられた、怒られた」という記憶であつたら堪らないな」と頭に浮かんだ想いを手繰り寄せていた。反抗する子供を前にして、どんな親だつて感情的になる。抑えられない感情を、母親の立場で我慢しているのに、縛られたと、虐待だつたという記憶が残っていたら、やり切れない。決して抑圧しようとも、自分の思うままにしようとしたわけではな

い。

いまの珠緒に残っている、いじめられたというどうす黒い痛みは、久美子にとっては身に覚えがないものばかり。謝つて済むものでもないし、治す手立ても思いつかない。そして珠緒は母親を許そうともしないでこれでもかこれでもかと報復ばかりしてくる。迷宮入りで打開策がない。しかし、と思う。

久美子は、頭の中に生じた疑問に向き合つた。

「この娘は、大きくなつて、母親に向かつて自分がゴネたことを思い出すだろうか、思うようにならない自分の反抗期であることを忘れて、母親からいじめられたとか、抑えられたとか、そのことばかり強く記憶に残るのだろうか」と。思うと空恐ろしくなつた。子供の記銘力も正確でない、自分に都合いい方にばかり残る。

珠緒は、4歳まで独りっ子だつたから、私の強さは人一番強かつた。決して大人しい子ではなかつた。親子のやり取りをテープにとっておくことなどないし、今証拠に残っているものは久美子の日記ぐらいだ。しかし、これだつて彼女から言えば「お母さんが勝手に書いたのだから」というに違いない。そのぐらい親子の対立はデリケートで、どちらの言い分が正しいとい

うことはない。分からないことばかりだ。

確かに母子のような対立はどこにでもあるし、それを通してなければ子供は育たない、自立するための必須要件だ。

「私はお母さんにいじめられた」という言葉のみ独り歩きし、その結果、久美子の心に「何でうちの子は、母親批判ばかりして」と、思う。これが人生に翳りを感じる。母親を信じない子どもも不幸だし、言われる母親も、20年以上手塩にかけて育てたのにと、いう報われなさに傷付いて、娘が嫌いになるか、自信を失うかどうかだ。久美子は先の方で、今の珠緒は嫌いだ。

世の中には「お母さんが嫌いだった、お母さんから脱皮したために逃げだした」という新鮮味のない言葉を多く聞く。

久美子は、その時、いつも「うそでしょう」と思っ  
てしまう。

反抗期の子供をどのように育てたか、また私の強い子を一人前にするのに、どのぐらい大変な思いをしてきたか、誰にも理解されれない。それが大きくなった時の対抗戦であったとしても、母子間の平等なジャッジなどあるわけがない。

母と娘のズレって大きいと思った。珠緒から母親に

いじめられた話ばかり聞く。どの言葉も久美子には覚えがないことばかりだ。誰か他人の話を聞いているようで、現実味がない、だからいつも平行線をたどって、行きつくところは、母と子の深い溝になって、一生埋まらないで終わってしまうのか、としたらそれは大きな哀しみだ。

先週の水曜日、出勤する娘の珠緒、学校に行く3年生の諭と久美子、3人が一緒に家を出ようとすることから玄関は、コートやらカバンでごちやごちやだ。

「おばあちゃん」と、とつぜん諭が久美子を呼んだ。

「お父さんとお母さんが喧嘩してお父さんまた家出したの」と言った。

久美子は、傍にいる珠緒の顔をちよつと見たが、彼女には聞こえなかったのか、ソラ、イソイデ、ハヤクとかいつも急かす言葉を掛けて、一時も早く玄関から出ようとしている。

高校生の敦也と諭の面倒を見て朝帰りする久美子は、諭の言ったことばを確かめることもできず、いつものようにバイバイと手を振って分かれた。

久美子はバスに乗るため大通りへ足を早やめる。バスの座席に落ち着いたとき、別れ際に言った諭の言葉が耳に蘇った。昨晩から、今朝にかけて一緒にいたときはなにも言わない彼が、玄関を出るとき簡単なタツチで言ったタイミングは偶然なのか、それとも急に思いついて言わなければと思ったのか分からない。が、彼にとつては胸につかえていたことを吐き出したかっさに違いない。

敦也が生まれたときから保育園の迎えを頼まれてきた久美子は、娘の親子、夫婦喧嘩は見飽きているが、「家出した」ということを諭からはじめて聞く。それも厳寒と言われるこの時期、友和は家を出てどこへ行ったのだろう。喧嘩したのはいつなのか、何が原因なのか、時間があれば確かめることができたが、急いでいる時間帯なので何も訊きだせずに別れてしまった。

久美子は、定年まで地方自治体に勤めていたので、共働きには理解があるつもりだが、珠緒夫婦のような民間会社の多忙さは想像つかない、残業は50時間の契約だがその倍は残業している、子育て時期の夫婦にはあり得ない生活環境だ。

共働きを続けるには独りっ子で充分だと思っていた娘夫婦に思いがけず8年ぶりに次男が生まれた。独り

っ子には反対だった久美子は、次男の誕生を、神様からの贈り物のよ、と称したいぐらいうれしかった。

しかし、この時期、珠緒夫婦はそれぞれ責任ある立場に付いていて、夫婦が分担する育児でも子育ての間は最少で、綱渡りのような生活をしていった。

昨晩は、歯磨きまで済ませた敦也たち2人と1階で寝た。10時までに眠らせることが久美子の役割なのだが、夜更かしにならされた諭でさえ、テレビマンガを見たくてなかなか寝つかない、時間通りに寝かせるのが至難の業だ。だから、昨晩友和が帰ってきたのか、来なかったのか、諭が話すまで、久美子はなんにも気付かなかった。

友和は、どんなに遅く帰っても朝食も執らないで出勤する。早朝、京王線沿線の会社まで通っているので、ベッド代わりに、座席に座って行けば、睡眠不足が補える。食事はどこでも出来る、職場にパンを買ってパソコン打ちながら食べれば仕事も捗る、というお寒いサラリーマン事情が続いている。

久美子が乗った駅までのバスは15分足らずで到着する。車内は、通勤・通学の流れは終って、主婦や老人たちの時間帯になっていた。6キロ先の出発地点から乗ってくるダウンジャケットで膨れた小母さんたち



は朝から元気がいい。大声で、寒さで水道が凍った、野菜が高騰したとか、現実的な話をしている。

久美子は、現実にもどれないまま、出がけに聞いた諭の話にこだわって、もつときちんと確かめればよかったと心残りが尾を引いていた。

金曜日、児童クラブに諭を迎えに行つた。

教室の外に備えた靴脱ぎ場からドアを開けて声を掛けると、広い教室に学年ばらばらの仲間七、八人と諭はおやつを食べていた。いつもなら諭が最後になることが多いが、今日は仲間がいるので、ホツとした。

久美子の顔を見ると、「いま食べちゃうから、待っていて」と大人びた声をあげた。部屋は暖房が利いて暖かい。10分と待たずに、両手にカバンをぶら下げた彼が出てきた。パンツの膝の穴が眼に、先週からだからほころびが大きくなっている。ジーンズの当て布を用意してきたので、今夜こそ繕ってあげられる。

厳重に施錠してあるゲートから出ると、空だけ明るく満月が出ていた。

「諭ちゃん、お月様」久美子が指差すほうに諭も背伸びして見上げた。

「ぼく、先生に教わつたよ、本当はウサギさんいないんだって」諭が天に指さしている。一緒に見上げた久美子まで楽しくなって、

「保育園の時にはウサギさんだと習つたよね、今は月まで宇宙旅行できるから、ウサギさんは海だったの」と、歩きはじめた諭に教えた。

「海か、なんだ、詰まんない」諭の月への関心は一時で、すでに足を速める。

「家に、お兄ちゃんいるかな」

高校三年の兄の帰宅を必ず訊く。いつものことで彼は決して両親の帰りのことは訊かない、久美子の迎える日は両親ともに夜中の帰りだということを知っているから、訊いてもしょうがないと思っているのだ。

「諭、お父さんは、帰ってきたの」4日前に言ったことを確かめたくて、すでに先を行く諭に、暗い道、足元に気をつけながら久美子は早急に訊いた。

「今日、帰ってくるんですって」

「どこに泊まっていたのだろう」

「川崎に決まっているよ」諭は、慣れたように言っ駆けて行くこうとした。

久美子は、諭を止めてもつと詳しく聞きだそうとしたが、その先は、彼は言いたくないのか答えなかった。

後からきた自転車が急ブレーキをかけて停まった。「横に並んで歩いては危ないじゃないか」と、自転車の高校生に叱られた。

自転車を通した後も、久美子は話を止めない。「それから」と促した。

「大丈夫だよ、お父さんは、おばあちゃんが来てくれていれば、必ず帰ってくるから。おばあちゃんがいると食事がおいしいんだって、洗濯もしてあるし」

「原因は何なの」

「お母さんが帰ってきたときにお父さんが返事をしなかったから怒ったの」論は思い出して答えてくれた。

「何でだろう」

「知らない。お母さん忙しいと寝不足でいらいらするからだろう、便秘もするし」

久美子は論とこんなに突っ込んだ話が出来てうれしい。彼の言葉は正確で、省略しないで教えてくれる。

「そんなこと、いつもあるのかな」

「出て行ったのは2回目かな。喧嘩はよくするけど」少し飽きてきたのか、久美子にもういいだろうとサインを送ってくる。小学生の諭には少し突っ込み過ぎ

た。彼女は自分の興味で訊き過ぎた。

「ほんとうに、はじめて家出したのね」

「お父さんはね。お兄ちゃんは時々あるけど、でも出て行かないよ」

「普通そうだよ、夜でしょう、寒いし」

その時、珠緒は何していたのだろう、出て行く夫を止めなかったのか、それとも本気で出て行くとは思っていなかったのか。それにしても友和さんは今どこにいるのだろうか、仕事には行っているのだろうか。

「僕の家ってどうしてみんな喧嘩をするんだろう、ぼく喧嘩嫌いだ」

諭は両手を上げて久美子の前に立った。もうしゃべりたくないと言わんばかりに。しかし、久美子は、まだ止められなかった。

「みんな忙しいから、切れやすいのかも。でも一週間も家を空けるようなお父さんじゃないわね、なんか理由があるのかな。どこにいるのだろう、寒いだろうに」

諭は、返事をしない。

久美子は、この二、三日、冬の寒さだけでなく、娘夫婦の喧嘩を思い遣ると孫が不憫で仕方がなかった。

次の朝、明け方に帰ってきたらしい珠緒だが、寝不足の様子もなくいつもの調子で今日の予定を言う。

「1日、お願いね、私は研修会、夕方には帰ってきます」

す。敦也は部活で帰りは当てにならないから」

秘書の仕事は情報の手先を行かなければならない、そのせいか専門性を高めあうのか休日の研修会が多い。友和は、学校の教材を扱う出版社に勤めている。企画の仕事が多いので持ち帰りができる。極力、休日は休み、珠緒をカバーしている、共働きのモデル夫だ。

久美子の子育て時代は夫の協力を求めるなど、ご法度に近かった。仕事をしたいのは母親の我儘だと言われ小さくなって生きてきた。それから見れば友和の協力は凄いい、久美子にも気遣い、家事の回数を最少にしてくれている。本来は、自分の親に頼まなければいけないのという負い目があるようだ。久美子は、そんなことがないと否定している。孫の世話は、久美子にとつて大きな楽しみである。敦也も論も、世話をすれぱするほど、久美子に懐き、自分の子では味わえなかつた愛しさを増す。娘の子どもは自由に介入でき、娘の家のせいも、自宅と同じようにスムーズだ。

午後、風が出てきた。布団の下に敷いた新聞がぺらぺらとめくれ、音を立てる。この様子では布団の湿気を取り除いてくれるだろう。肌掛けの毛布はもつとよく乾く。布団干しだけ考えても、この一日は役に立つ。

気になっていた手紙も書いた。落ち着いた時間でなければ、便せんなど使うことがなくなつて、ほとんどの人にはショートメールで間に合わせてしまう。

論が帰ってきた。ドアの外で友達としゃべっている。これからの遊びの相談だ。おばあちゃんがいるから大丈夫だとも言っているのだろう、久美子は、本質的に子どもは外遊びをさせたい、それも陽が落ちるまで。今は5時50分に落ちるから、論は5時半を過ぎれば戻るだろう。彼は約束を守る子だから面倒見やすい。論自身は、ネガティブな生活はしたくないと言う。大人っぽい言い方で、「いわゆる危ない橋は渡らない」ということだ。日没過ぎて外で遊ぶのはネガティブだと言う。大人がいない時は、もつと気を付けて早めに家に戻ってきている。家の中遊びでは、親に許可を貰つた人の中に入れる。その人は、5時にはさよならすることになっている。

夕方、珠緒が約束通り5時に帰ってきたので論を引き渡し、瀬上駅から電車に乗った。まだ十分買物もできる時間だが、寄り道せずに帰ってきた。

論は宿題も、敦也のYシャツも全部洗ってきた。白いものを白く洗うのは久美子の得意中の得意だ。布団も日光に干した。休日、出来ることは何でもした。今

晩のカレーと、明日のお弁当になるハンバーグも焼いて置いたから珠緒は楽だ。敦也にはおいしい食事と、おいしい弁当。明日、つつがなく学校へ送り出すことができるだろう。

## (5) 母親の祖母

決算期の六月末、二週続けて瀬上に通った。

昨晚、論と一緒に風呂に入っていた時、彼が無意識に言った言葉がある。

「おばあちゃんは、お母さんのお母さんよね、おばあちゃんがお母さんを生まなければ、僕は生まれなかったんだ。おばあちゃんがいるから僕たちもいるんだ」という内容の深いメッセージに尻が濡れた。

論は久美子に思いついた言葉を何でも話す「おばあちゃんがいるから僕がいるんだ」ということは、今まで考えもしなかったろう。そしておばあちゃんの前の人、會ばあちゃんまで、考えが及ぶようになった。

「論とおばあちゃんは似ている、文系だね」と。彼の話はいつも意表をつかれる。敦也と話しても先へ先へと伸びることはない、語彙がないのか、想像へと言葉が続かない、いつも一言で終わって、質問されること

もない。それで話は終結しまう。その時、論が入ると「なぜ？」「どうしてなの」と訊かれるとさらに話が広がる、これを久美子は文系とよんでいる。

7月18日は論の誕生日。誕生日のお祝いに「妖怪ウォッチ」が欲しい、と、10歳になる論からの要望で、7月10日の販売に向けて久美子は奔走した、が、予約が一月前に閉め切っていてその予約数でさえ、製造が間に合うかどうかという売れ行き、店頭販売などあり得ないと断られた。

友達みんな持っているんだ、というおばあちゃん殺し文句で久美子は急きたてられた。

「誕生日のお祝いに買ってあげるよ」と 簡単に論に約束した。いま、そんなに売れている新製品だとは思っていないかったので、いくつかの店をあたればなんとかなると、安易に考えていた。

「おばあちゃん、神様だ、ありがとう、うれしい」と論は現実を知っているから、おおげさに礼を言う。

神様とまで祭られては、実行に移さなければ、と走り回ったが、どこの店でも、ブームが去れば手に入りまずけど今は無理だと、簡単に片づけられる。

待っていたのでは、論の誕生日は過ぎてしまう、そ

れだけでなく彼の役に立ちたいと、久美子は氣負い奔走した。論が一日千秋の思いで待っているかと思うと不憫でならない。

何箇所かの店で、発売日の10日過ぎなら、通販で、買えるんじゃないかな、と耳寄りの情報が入った。「ただし一割ぐらい高いかもね」と。この際、一割ぐらい何ということもない、お金としたら500円だ。

インターネットで簡単に予約できた。論にこの経過を教えると、「僕んちへいつ届くの」その日の確認ばかり。五、六日後には、と確実だと思える線で、論に伝える。

論は学校から帰つてくると、宅配を気にして家を空けられない、「今日も来なかった」という失望の電話が夕方ある。

「おばあちゃん、今日も来ないよ」という声を聞くと、久美子まで焦つてしまう。

この日には届くと予想した5日目、届いたという、「おばあちゃん、ありがとう」という言葉が飛び出すその瞬間を待ち焦がれた。

夕方、6時になった。今日、配達するなら、もう着いている頃と、7時を待って電話をかけた。空はまだ明るいが、すでに明るく光る半月が出ていた。足もと

にテップウユリが咲き、揺れている。

「学校から帰ったら、すぐに届いたよ」論の、宅急便屋さんが持ってきたという他愛もない事後報告に、久美子は言葉が詰まった。

「間違ひなく『妖怪ウォッチ・本家』だった？」久美子は急ぎこんで訊いた。

久美子は、携帯電話でかけているのに、そこにマイクがあるかのように口をつけてしゃべった。いいばあちゃんしているという、自分の恰好づけ、水位が上がつてびたびたしている。

「間違ひない、もう拵げてみている、動いているよ、こんなはず開けられるもの」

え、と思った。開ける話ではなくて、その前に届いた話があつてもよさそうなのに。なぜ、電話くれないのという心の叫びとともに、自己満足していた久美子の水位がぽちんと落ちた。

「論君、なぜ、すぐに知らせてくれないの、おばあちゃんずつと待っていたのよ」

「あ、忘れていた。さつき届いたから、その前にお母さんに『開いていいかどうか』訊くと、いいというので、はじめた」

「なぜ、お母さんなのよ」と口の中で言葉が空回り

した。熱くなった胸を抑えて息を止めた。久美子の胸が痛くなった。やっと立てなおして、言葉を探したが見つからない。

「論君もつとなんか言うことあるんではないかしら」  
10歳の孫にこんな言葉を期待する大人げなさに嫌気がさした。

「何を？」論の手はすでにゲームを動かしているに違いない、電話を早く終えたいのだ。

「ありがとうとか、うれしいとか、いう言葉」

「あ、ありがとうね」と低い声で応える。オウム返しだ。

久美子はこんなものか、と土俵から外にうっちゃやられたような寂しさを味わった。3時ごろから待っていた論のはずむ声、「おばあちゃん、ありがとう、うれしい！」と期待した言葉は電話の中から出てこないで、「もういい」切ってもいいかというという催促。

「いいよ」勝手にしろと思った。

力強く映っていた月が、ただの蛍光灯に見えた。月に思いを託すなんかバカみたいだと、こころでけなした。期待されていたおばあちゃんが、ころつとこけたような心境。全く、なんだよ、この結末は。「おばあちゃんありがとう」と歓喜の声が自然に出てこないのか

よ、とため息をついた。この一週間で積もった疲労感を、大げさでなく味わった。

論の二桁、10歳の誕生日、期待した割には「妖怪ウオッチ」の尻つぼみの幕切れであった。やり場のない不透明な気持ち、久美子は日記に「論は綿菓子みたいだ、膨れて大きい時は美味しそうだが、なめてゆくと得体の知れないものだけ残る、彼の中にあるおばあちゃんの存在は弱い」と付けて、日記帳を閉じた。

五月、友和さんから直かにメールを貰って、瀬上に、泊りで論の世話に来た。

5時限の下校は、3時半に家に着くと聞いていたのだ、その前に家に入っていようと、3時から部屋の雨戸を開けて待った。

偶然にも久美子は、自分の子供に出来なかった「お帰り」と迎えられる時間を持って、幸せだった。久美子も仕事一筋に生きてきて、年次休暇を全部使い果たしてでも、学校から帰る子供を迎えるという心のゆとりはなかった。

3時半近く、「おばあちゃん」が家で待っているなどゆめゆめ思わない論がのっそり帰ってきた。5年生に

なつて背丈は、クラスでも2番目に大きい。首に巻いたタオルまで大人びている。

「お帰り」と声をかけた。「あ、おばあちゃん来ていた。急いで来なくても良かったのに」

「でも、学校帰りを戸を開けて待つていたかったんだ」久美子はいつもより大声をあげた。諭は内に入らずに、まだドアの外に立っている。彼の顔色は日焼けしてジャガイモのようだ。

「おやつは、なに？」諭は、そんな質問を訊かれたことがないので、不思議そうな顔をした。

諭は、家を上がろうとしていたが、久美子がいるならとカバンを置いて、向きを変えた。

「いいよ、僕外で遊ぶ。友達が待つているから。帰ってからおやつ食べる」

「何時に帰る」久美子の問いに

「五時には帰る」きつぱり言った。

いつもなら、遊びに行く時も鍵を掛けるのだろうが、久美子がいるので安心して自転車で消えた。

久美子はすることもなくポストを覗くと夕刊が入っていた。川崎の14歳の少年の笑顔が一面に載っている。彼の記事が社会面をにぎわすほどこの事件は痛ましい。彼が年上の不良青年の餌食になつて、寒い川に裸で泳

がされたあと、獲物を殺すようにナイフ突き刺して出血多量で絶命させた、という記事。まるで殺すプレイのような映像が浮かぶ。その時の彼の恐怖、絶望感は計り知れないだろう。

この記事を何度も読んでいるが、正月から登校拒否していた彼の家庭生活は、どんなだったろうか。孤独で、誰にも声をかけられない生活を日々送っていたとしたら、その時、身近な家族は何の危機感も持たなかったのだろうか。ここからすべてが発せられたと思う。母がいて祖父、兄、そして遠いところだが父がいたのだ、そこにSOSを出すすがあつたと思うのだが、この予想は甘いのだろうか。なぜ、母親は、近くにいる祖父を頼らなかつたのだろうか。これは久美子の一番の関心事だ。

今、出かけた諭だつて、学校から帰つて来ても、誰もいない、その時間が5時間。やつと母が帰つて来ても、忙しない時間の流れの中で夜が過ぎる。彼は話したい気持を言葉にできずにうろろする。そんな日々の繰り返しであればやがて、気持ちよく迎えてくれる不良仲間に入つてしまふかもしれない。そんな危ないものを抱えている。

久美子は3人の子を持つたが、姑がいつも家について

孫を迎えてくれた。仕事の時間は5時に終わっていて、残業があると言っても小さい子を持つときは割り振られなかった。だから、ほぼ夕方6時から7時には帰れた。それでも日中の迎えはできなくて、子どもにも不満を残している。その端的な表現が、珠緒がよくいう「構ってもらえなかった」という言葉だ。

久美子は、6時に帰ってくると言って出て行った諭がそろそろ帰るかもしれないと、玄関から外へ出てみた。

「6時は、まだ明るいよ」と諭が何気なく言って出て行った言葉のとおり、外は明るい。つい一週間前までは、日陰の部分が暗くなって、日に当たっている空間だけ明るかったのに。それが一日一日と日が伸びて、今の6時はまだまだ外仕事ができるほど明るい。車もまだライトを点けずに走って行く。

久美子は、諭が帰ってくる方向を見ていて、ふと思いついて手を挙げ深呼吸をした。体にたまった空気を全部外へ出した。10回もやると気分が快くなる。最近では白髪は染めないが背筋は伸びているつもりだ。諭に嫌われたくないので口紅もつけている。久美子はまだまだ孫の世話ぐらいできると自負して体を回した。

ブレーキの音がして目の前に自転車が停まった。

「6時びつたりだろ」

「え、ちよっと、遅いよ」

「お腹すいた、今晚のごはん何？」

諭の顔は、すでに空腹を訴え、久美子の匂いを嗅いでいる。

「何でしょう」

「分かった、肉の匂いだ。僕は鉄火井と鶏のから揚げがなければ嫌だからね」

「この子は」と思っただけ彼の鼻をつまんだ。汗をかいている、ギタギタ。

「なんでもいいから、風呂に入っただやだやだ、背中も濡れている。風邪ひくでしょう」

「鉄火は合っているとして、次は、おばあちゃんの得意なハンバーグも食べたいな」

「了解」久美子は、どういう訳か、孫の前では料理通に見えるから不思議だ。

諭は真黒に土で汚れた手で、久美子に捕まった。「汚い」と払おうとしたが、彼は離してくれない。

諭と立ち話ししている間に、陽が落ちてきたがまだ暑い。

「諭ちゃん、家に入ろう」



家の中の方が涼しい。エアコンを2度下げた。論はテレビマンガを観はじめた。

「諭ちゃん、夕飯は何時？おばあちゃんは、宿題をし  
てから食べたいな」

久美子は諭に甘えた声で話しかけた。

「じゃ、7時に食事」

「宿題は、30分掛かるから6時ではどう」

「いいよ、7時に宿題、8時に夕食、これで決定」彼  
と同じ目線で会話ができて楽しい。

「了解、と言って手を挙げる」

久美子は、諭の小さなときのしぐさを思い出した。

彼が静かになった時、「諭ちゃん、いる」と声をかける  
と、座り込んでいた諭が、小さな体をのぼして「はい  
」と手を挙げて返事をする。その恰好が可愛いくて、  
また「諭ちゃんいる」とテレビに夢中な彼に問う。ま  
た「はい」と言って手を挙げた。この往復がなんと  
も楽しかった。椅子に隠れてしまう、その小さな姿が  
愛しかった。今はその時の3倍になって胡坐をかいて  
いる。久美子に近い上背だ。

宿題は漢字だった。100問。難しい漢字、たとえ  
ば、「懇意」など、久美子でさえ、手書き出来ないもの  
がある。四年生で一生使う漢字を覚えちゃうのだから、

子どもの脳というのは絶対だ。何でこんなに吸収する  
のだろう、諭はほとんど書けた。

この時代をのんびり過ごすなんかもつたない、ど  
んどん詰め込んで、覚えさせたら後が楽だろうに。し  
かし、それは外から考えることで子どもは無自覚だか  
ら、覚える楽しみなど知っていない、なんとか勉強か  
ら逃げようとする。久美子の子供のことを考えても、  
遊びに夢中で、「勉強」と言えばいやな顔をした。特に  
男の子は外に関心が向くから、勉強させるのに手を焼  
いた。

夕飯はゆっくり食べたいと、久美子は先に風呂に入  
った。

テーブルに載せた料理は、鉄火丼、鶏のから揚げ、  
ブロッコリーの炒め物。諭は黙々と食べる。「おばあち  
ゃん、まだあるよね」と、鉄火丼を空にして訊く。

「日本産のマグロは高いんだからね」  
独りで冷蔵庫の中を覗いていた諭は、「あ、まだマグ  
ロが残っている」と大声をあげた。「もう半分作るね」  
と彼の食欲に迎合して、2杯目を作った。「ウオー」と  
掛け声上げてテーブルで待っている。

「おいしい？」と、確認したくて訊く。「おいしい」「良  
かったね」「うん」と交互に言って落ち着く。決して上

手と言えない久美子の手料理でもオーバーに称賛してくれる。久美子は、このやり取りだけでうれしい。もうすでに面倒をみに来ている苦勞が消えた。

ほぼ30分で食事は終わった。

「論、お腹見せて」久美子が傍によつてシャツをあげる。膨れたお腹がごろつと出てきた。「やだ、太らせてしまったみたいね」久美子は、どうしようというように声を上げた。「大丈夫だよ、明日腹筋するから、おばあちゃん手伝つて」

「いいけど、腹筋では痩せないよ」

久美子も無責任だ、たくさん食べさせて、太るなどは勝手な言い方だ。論は肥る年齢だ、周りが気をつけなければ、食べたいだけ食べさせていいわけがない。

9時、風呂から出た彼は、バスタオルで体を包みながら、久美子の前に来て、チョツ、チョツと前をはだける。

「おばあちゃん、僕普通？」と訊く。

「少しお腹が大きいかな、でも明日にはやせるよ」

まだ、傍に来てチラチラバスタオルを開け、締めしてみせる。

「何？」久美子はびっくりした。

「はずそうか、どうしようかな」

「どうしたの、おばあちゃんに何か見せたい物がある」と？」

「そう言うわけじゃないけど」

ぱつとバスタオルを広げ、足まで揚げた。

「あ、見えた、大きなおチンチン」

「やだな、見られたかーどう」

「どうつて、大きいよ」

「でも、まだ、毛が生えないよ」

「お兄ちゃんも5年生で一氣に生えたから、今年は出てくるよ」

「大丈夫かな」

「大丈夫だよ、もうすぐだ、だって、口髭がではじめたみたいだよ」

論は納得したのか、脱衣所に消えた。

「歯も磨くんだよ」

脱衣所に消えた論に、久美子は、手ラップで声掛けた。

やつと論が風呂からあがってきた。まだ久美子の寝ている枕元でぐずぐずしている。

布団に入れるまでが一仕事。普段10時過ぎまで起きている習慣の論を、9時に寝かせる。5年生が10時過

ぎまで起きているのはもつてのほかと、段取り良く9時に布団に誘う。

誘う餌は、「背中搔いてあげるから」というインパクトのある言葉。論はずぐに飛びつく。「パーで両手を使って50回」と要求が高くなる。頭の毛まで搔かされる。なかなかの知恵者だ。

体を寄せてくる彼はまだまだ幼い皮膚のまろやかさばかりだが、一時もすれば少年のような筋肉質の体になるだろう。もう少し面倒見たい、と思って彼の背中に搔いた。すでに論はいびきをかきだした。

## エピソード

珠緒の言い分ってなんだろう、言葉の切れはしでなく、全部訊きたいと思う。しかし聞いた時、久美子は神妙に謝るだろうか、いや決して謝らないだろう、久美子は、きつと娘、珠緒と絶交するであろう。そんなことを思っていたのか、そんなに母親嫌いなのかと言って、絶交するであろう。そのぐらい珠緒との淵は深い。将来のことを考えたら、本音は訊かない方がいいのかも知れない。

この数年間、珠緒からいいことを訊いたためしがない。

い。年中「え」と思うことばかり、「どうして、そんなことを思っているのだろう」というがけつぷちに立つような気持ちちを味わってきた。久美子の存在を一番ネガティブな像として見せつけられるのは長女の珠緒だ。久美子の手で育てた子がこんなに批判的なのか、なぜ、母を憎むかと思うと気分が落ち込む。

ある日の新聞に、「長女はなぜ『母の呪文』を消せないのか」というタイトルの帯、宣伝文をみた。母のひとことが娘を縛りつけ、「生きづらさ」をもたらしめている！ その一言とは、「あなたのためなのよ」「あなたならできるわ」「しっかりしなさい」というキャッチコピーである。

なぜ、こんな言葉が引つかかって、生きづらさをもたらされているのか、という疑問にぶつかる。久美子もこのような、類似した言葉を子育て中にさんざん使ってきた。大して問題のある言葉でもなさそうだが、たとえば、「馬鹿だね、そんなこともできないの、のろいんだから」。もつとひどいことも言ったような気がする。「そんな子を産んだ覚えはない、親不幸、すぐ泣く」。でも言葉は動くもので、相互作用があつて、反応する中で言っている。そのときの子どもの状況もある、子どもはもつとひどいことをしているかもしれない。そ

の現状を見なければ分らない。

久美子が長女の珠緒から聞く、「嫌だったという言葉」を単純に表現すると、「お姉ちゃんだから、我慢しなさい」「はつきりして頂戴」「勉強しないならお嫁に行きなさい」「いつも遅くぐずぐずしているのだから」という言葉を投げつけられたという、子育て中のお母さんならこんな言葉はさらに言っている。その言葉でひどく傷付いたのだと言うならどうしようもない。でも親は子供可愛いさに、つい感情的になってしまう。

しかし、愛情がいっぱいあるから自信も持っている。子どもがそんな言葉で傷付いたなどユメユメ思っていない。「母親の呪文」など、他人ごとと思つて、気にも留めていないのが常なる母親ではなからうか。

それが、ある日突然、思春期になった子どもから「ひどいことを言われた」と言い返されると驚き、あわてふためいたというのが実情だ。

しかし母子関係は、長い時代、こういった類のもので構築してきているのではないか。何にも知らない子どもを育てるときに、勉強しなければ、勉強するようと言うし、言うことをきかなければお尻の一つや二つ打っている。それでもしなければ社会に通用する子どもが育てられない。そして、母親の習いとして、子ど

もに言った言葉を記憶していることは少ない。それなのに、母に言われた言葉が呪文のように娘を縛つていたと聞くと、青天の霹靂に驚く、これが普通の母ではなからうか。その上、その行為が、今はやりの母原病だと言われれば、世の母親は自信を失くし路頭に迷うだろう、実際久美子も自信を失くした。

珠緒はすっかりした子で、下の子の面倒をよく見てくれたのも義母のおかげだ。義母がよく言っていた言葉に、

「長子をきちんと育てれば、後は楽だ」と、そのことばの通りで行けば、珠緒は行儀のいい子に躰けられていくはずだ。

たしかに、長女の珠緒と一緒にいると、触れている部分が何とも言えないざらざら感、そこから緊張感が流れてくる。自分の娘でありながら、これは何だろうと思う。そしてその異物感は、いつからどのように感じ始めたのかわからない。物体でなく、感じるものなので、具体的に説明しようがない。それは決して心地よいものではなく、緊張を伴うものであった。

それは母娘が同じように感じるのかどうかわからないが、久美子を感じるんだから、珠緒も感じるに違いない。娘に違和感を感じるなどナンセンスとしか言い

ような感じが、しかし、この緊張感を感じたくて感じるものではない。自分が産んだ娘、それも初めての出産で、最善を尽くして育ててきたつもりなのに、この他人に味わうような緊張感は何だろうと思った。

珠緒は決して冷たい子でもなければ、親をないがしろにするような子でもないが、でもなぜかそこには、彼女に「叱られる」という恐れ、張り詰めたような緊張感がいつもある。